

丹波市

# 山田大山古墳群

- (砂) 大山谷川通常砂防事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -



平成29(2017)年3月

兵庫県教育委員会

丹波市

## 山田大山古墳群

- (砂) 大山谷川通常砂防事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -

平成 29(2017)年 3月

兵庫県教育委員会



調査地点遠景 南西から



調査地点（大山谷川）近景 南から



調査区遠景 南から



調査区全景 北西から



2号墳出土土器



6号墳出土土器



5号墳石室土器出土状況



5号墳石室出土土器

## 例　言

- 1 本書は、丹波市春日町山田に所在する山田大山古墳群の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、(砂) 大山谷川通常砂防事業に伴うもので、丹波県民局丹波土木事務所の依頼に基づき、兵庫県教育委員会を調査主体として、兵庫県立考古博物館、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部を調査機関として実施した。

### 3 調査の推移

山田大山古墳群の調査は周辺の分布調査の開始から本発掘調査の終了まで、平成 23 年度より平成 26 年度に亘っており、その詳細は第 1 章にあげた。本報告書に直接関わる試掘調査・本発掘調査は以下の通りである。

- なお、5 号墳については石室を解体せず、現地にて保存している。
- (発掘作業)
- |                                   |  |
|-----------------------------------|--|
| 確認調査                              | 平成 25 年 8 月 27 日～8 月 28 日（実働 2 日間）     |
| 実施機関：兵庫県立考古博物館                    |  |
| 本発掘調査                             | 平成 26 年 6 月 9 日～26 年 9 月 16 日（実働 61 日） |
| 実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部 |  |
| 工事請負：有限会社 山中掬水緑化                  |  |
| 確認調査                              | 本発掘調査期間内                               |
| (出土品整理作業)                         | 平成 27 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日       |
| 実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部 |  |
| 平成 28 年 4 月 1 日～平成 29 年 3 月 31 日  |  |
| 実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部 |  |

- 4 本書の編集・執筆は、第 4 章第 4 節を除き公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部 西口圭介・兵庫県立考古博物館 鐘 英記が行った。

- 5 本調査において出土した遺物や作成した写真・図面類は、兵庫県教育委員会（兵庫県立考古博物館）で保管している。

### 6 その他の記載項目

- ・ 調査成果の測量は、電子基準点西紀・福知山・青垣。座標は世界測地系に基づくもので、調査地は第 5 系に属する。
- ・ 本書に用いた方位は座標北を示す。また、標高は東京湾平均海水準を基準とした。
- ・ 空中写真測量は、(株) GIS 関西に委託した。

- ・ 遺物写真撮影は、株式会社クレアチオに委託した。
- ・ 本書の図版1「調査区とその周辺」は、丹波県民局提供の1/500 工事用図面を縮小して使用した。
- ・ 現地の遺構実測は、調査員と調査補助員が行った。
- ・ 遺構の製図および遺物の実測・製図は兵庫県まちづくり技術センター嘱託員が行った。
- ・ 5号墳の炭化物について、放射性炭素年代(AMS測定)を(株)加速器分析研究所に依頼した。
- ・ 発掘調査にあたって岡山理科大学 亀田修一先生よりご指導を賜った。

また、山田地区自治会及び現地に近接する特別養護老人ホーム『おかの花』には詰所用地・車両通行・駐車場使用などにおいて多大なご厚意・ご配慮を賜った。本発掘調査中には「丹波市水害」が発生し、本調査区周辺についても被害は甚大であったこともあり、これらのご厚意・ご配慮について特に記して感謝の意を表すものである。

## 目 次

### 本 文 目 次

第1章 はじめに	
第1節 調査に至る経緯	(1)
第2節 各調査・整理作業の経過と概要	(1)
第2章 位置と環境	
第1節 地理的環境	(3)
第2節 歴史的環境	(3)
第3節 山田大山古墳群の立地と周辺の遺跡	(7)
第3章 確認調査の概要	
第1節 調査の方法	(9)
第2節 調査の結果	(9)
第4章 本発掘調査の成果	
第1節 調査区の概要	(11)
第2節 道構	(12)
2号墳	(12)
6号墳	(13)
5号墳	(14)
石棺墓 SX10	(16)
不明石組造構 SX11	(16)
中世墓状造構 SX08	(17)
中世墓状造構 SX09	(17)
中世墓状の集石造構 SX02	(17)
ピット群・焼土坑群・丹波焼甕・錢貨	(18)
火葬址造構 SX07	(18)
第3節 遺物	(20)
2号墳の出土遺物	(20)
6号墳の出土遺物	(20)
5号墳の出土遺物	(21)
その他の出土遺物	(21)
第4節 山田大山古墳群における放射性炭素年代(AMS測定)	(24)
第5章 まとめ	(27)

### 表 目 次

表1 周辺の遺跡	(6)
表2 遺物観察表1	(22)
表3 遺物観察表2	(23)

表4 放射性炭素年代測定結果（ $\delta^{14}\text{C}$ 補正值） ..... (25)

表5 放射性炭素年代測定結果（ $\delta^{14}\text{C}$ 未補正值） ..... (25)

## 本 文 排 図

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

第2図 [図版] 暦年較正年代グラフ (参考)

## 図 版 目 次

図版1 調査区とその周辺

図版20 5号墳及び上層の遺構

図版2 3号墳確認調査

図版21 5号墳 墳丘・周溝土層断面図1

図版3 第2次確認調査トレンチ土層断面

図版22 5号墳 墳丘・周溝土層断面図2

図版4 調査区全体図

図版23 5号墳 墳丘・周溝土層断面図 土層名1

図版5 2号墳・6号墳全体図

図版24 5号墳 墳丘・周溝土層断面図 土層名2

図版6 2号墳全体図

図版25 5号墳石室 平面図・立面図

図版7 2号墳・6号墳 墳丘・周溝土層断面図1

図版26 5号墳石室遺物出土状況図

図版8 2号墳・6号墳 墳丘・周溝土層断面図2

図版27 石棺墓 SX10

図版9 2号墳・6号墳 墳丘・周溝土層断面図3

図版28 不明石組遺構 SX11

図版10 2号墳・6号墳 墳丘・周溝土層断面図 土層名1

図版29 中世墓状石組遺構 SX08・SX09

図版11 2号墳・6号墳 墳丘・周溝土層断面図 土層名2

図版30 ビット群・中世墓状集石遺構 SX02・焼土坑群

図版12 2号墳 墳丘及び石室の状況

図版31 火葬址遺構 SX07 上層

図版13 2号墳石室1

図版32 火葬址遺構 SX07 下層

図版14 2号墳石室2

図版33 2号墳出土遺物1

図版15 2号墳遺物出土状況図

図版34 2号墳出土遺物2

図版16 6号墳 墳丘及び石室の状況

図版35 6号墳出土遺物

図版17 6号墳石室

図版36 5号墳出土遺物

図版18 6号墳石室遺物出土状況図

図版37 3号墳・その他の出土遺物

図版19 5号墳全体図

## 写 真 国 版 目 次

卷頭図版1 調査地点遠景 南西から・調査地点(大山谷川)近景 南から

写真図版6 1号墳区の調査

卷頭図版2 調査区遠景 南から・調査区全景 北西から

写真図版7 2号墳区の調査

卷頭図版3 2号墳石室出土土器・6号墳出土土器

写真図版8 2号墳 1

卷頭図版4 5号墳石室土器出土状況・5号墳石室出土土器

写真図版9 2号墳 2

写真図版1 空中写真1

写真図版10 2号墳 3

写真図版2 空中写真2

写真図版3 調査前の状況

写真図版4 周辺の古墳

写真図版5 確認調査

- 写真図版 11 2号墳 4  
写真図版 12 2号墳 5  
写真図版 13 2号墳 6  
写真図版 14 2号墳 7  
写真図版 15 2号墳 8  
写真図版 16 2号墳 9  
写真図版 17 2号墳 10  
写真図版 18 6号墳 1  
写真図版 19 6号墳 2  
写真図版 20 6号墳 3  
写真図版 21 5号墳 1  
写真図版 22 5号墳 2  
写真図版 23 5号墳 3  
写真図版 24 5号墳 4  
写真図版 25 5号墳 5  
写真図版 26 5号墳 6  
写真図版 27 5号墳 7  
写真図版 28 5号墳 8  
写真図版 29 5号墳 9  
写真図版 30 5号墳 10  
写真図版 31 石棺蓋  
写真図版 32 不明石組遺構 SX11・中世墓状石組 SX08 1  
写真図版 33 中世墓状石組 SX08 2  
写真図版 34 中世墓状石組 SX09  
写真図版 35 中世墓状石組 SX02・ピット  
写真図版 36 焼土坑  
写真図版 37 火葬址遺構 1  
写真図版 38 火葬址遺構 2  
写真図版 39 作業風景他  
写真図版 40 各古墳出土遺物  
写真図版 41 2号墳出土遺物 1  
写真図版 42 2号墳出土遺物 2  
写真図版 43 6号墳出土遺物  
写真図版 44 5号墳出土遺物  
写真図版 45 3号墳・その他の出土遺物

# 第1章 はじめに

## 第1節 調査に至る経緯

兵庫県丹波県民局丹波土木事務所が、丹波市春日町山田に所在の大山谷川で通常砂防事業を計画した。

この計画を受け平成23年に実施した分布調査（遺跡調査番号：2011082）において、事業地内には周知の埋蔵文化財包蔵地である山田大山古墳（遺跡番号：790029）と古墳の可能性がある2箇所の集石遺構（集石遺構1・2）が存在することが判明した。

平成25年度に入り、工事範囲の測量が完了したことを受け、再度詳細な分布調査を実施した（遺跡調査番号：2013100）ところ、砂防堰堤本体に山田大山古墳の一部と集石遺構1がかかり、工事用道路に集石遺構2がかかることが判明した。

上記の分布調査結果を受け、丹波県民局長の依頼（平成25年8月6日付け丹波（丹土）第1373号）により、2箇所の集石遺構について、兵庫県教育委員会が、確認調査を実施したところ（遺跡調査番号：2013107）、集石遺構1・2は共に6世紀後半～7世紀前半に築かれた横穴式石室を埋葬施設とする古墳であることが判明した。

これにより事業地内には以前から存在が知られていた山田大山古墳と共に3基の古墳が存在することが明らかになった。確認調査の成果をふまえ、以後、山田大山古墳を山田大山古墳群1号墳、集石遺構1を同2号墳、集石遺構2を同3号墳と周知・呼称することとした。

確認調査結果と工事計画を照合したところ、1号墳の周溝部および2号墳が砂防堰堤の設置により影響を受ける箇所に位置することが判明した。また、3号墳については損壊を免れることが判明した。

以上の結果から、兵庫県教育委員会では兵庫県丹波県民局丹波土木事務所からの依頼（平成26年4月15日付け丹波（丹土）第1893号）に基づき、堰堤工事により影響を受ける箇所の本発掘調査を実施することとなった（遺跡調査番号：2014008）。

また、調査の過程で本発掘調査範囲内に新たに2基の古墳（5号墳・6号墳）が存在することが判明し、それについても調査を実施した。

また、調査区北側において遺構の存在する可能性が生じたため、トレーニング2本を設定し、確認調査を実施した。

なお、5号墳は、構築される堰堤の内側に位置することから、丹波土木事務所との保存協議の結果、現状保存を図ることとなり、石室内に砂を入れて埋め戻した。

## 第2節 各調査・整理作業の経過と概要

〔分布調査 遺跡調査番号 2011082〕

所在地 丹波市春日町山田

調査主体 兵庫県教育委員会

調査担当者 兵庫県立考古博物館 埋蔵文化財調査部 調査第2課 別府洋二 長濱誠司

調査期間 平成23年4月25日

調査面積 800 m<sup>2</sup>

〔分布調査 遺跡調査番号 2013100〕

所在地 丹波市春日町山田

調査主体 兵庫県教育委員会

調査担当者 兵庫県立考古博物館 総務部埋蔵文化財課 主査 多賀茂治

調査期間 平成 25 年 7 月 29 日

調査面積 1000 m<sup>2</sup>

〔確認調査 遺跡調査番号 2013107〕

所在地 丹波市春日町山田

調査主体 兵庫県教育委員会

調査担当者 兵庫県立考古博物館 総務部埋蔵文化財課 主査 多賀茂治

調査期間 平成 25 年 8 月 27 日～28 日（実働 2 日間）

調査面積 20 m<sup>2</sup>

〔本発掘記調査・確認調査 遺跡調査番号 2014008〕

所在地 丹波市春日町山田

調査主体 兵庫県教育委員会

調査担当者 公益財団法人 兵庫県まちづくり技術センター

埋蔵文化財調査部 調査第 2 課副課長 西口圭介・同 鐵 英記

調査補助員 西本寿子・竹本正昭・瀧町昌寛

現場事務員 中祖晴海

室内作業員 西山はるみ

調査期間 平成 26 年 6 月 9 日～26 年 9 月 16 日（実働 61 日）

調査面積 本発掘調査 667 m<sup>2</sup>・確認調査 28 m<sup>2</sup>

工事請負 有限会社 山中掬水緑化

〔整理作業 平成27年度・平成28年度〕

平成 26 年度に現地にて土器洗浄を実施し、その他報告書刊行までの作業は平成 27 年度・平成 28 年度に実施した。

・担当職員（平成 27 年度）

調査担当者 西口圭介

整理保存課 菊田淳子・長濱誠司・岡本一秀

・担当職員（平成 28 年度）

調査担当者 西口圭介

整理保存課 菊田淳子・池田征弘・岡本一秀

・担当嘱託員・日々雇用職員（平成 27 年度・平成 28 年度）

今村直子	吉村あけみ	友久伸子	嶺岡美見	島村順子
------	-------	------	------	------

上西淳子	小野潤子	藤池かづさ	石田典子	佐々木誓子
------	------	-------	------	-------

池田悦子	寺西梨紗	宮田麻子	上田沙耶香	佐々木愛
------	------	------	-------	------

前田陽子	古谷章子	八木和子	河合たみ
------	------	------	------

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

山田大山古墳群は兵庫県丹波市春日町山田に所在する。

当古墳群が位置する丹波市は近代以前においては旧丹波国氷上郡に属し、平成16年11月に旧氷上郡6町（柏原町・氷上町・青垣町・春日町・山南町・市島町）が合併して誕生した。平成28年10月末時点では丹波市の人口は約6.6万人、面積は約493km<sup>2</sup>である。兵庫県の中央東部に位置し、市内西部を南北に日本標準時子午線（東経135度線）が通っており、北東で京都府、南東で篠山市、南西で多可町、南で西脇市、北西で朝来市と境を接している。

地形は中国山地の東端に位置し、最高峰を栗鹿山（962.3m）とし、四周を300m～800mの山塊に囲まれている。その山々を縫って、日本海側に注ぐ由良川の上流にあたる竹田川・黒井川と瀬戸内海に注ぐ加古川の上流にあたる佐治川・篠山川・牧山川・柏原川の流域それぞれに狭小な盆地が形成されている。氷上町石生水分（海拔95m）に由良川と加古川の中央分水界があり、日本で一番低い地点での分水界となっている。

山田大山古墳群のある春日町山田は市内東南部に位置する。三方を山に囲まれ、南に開いた谷部にあたり、黒井川が東西に流れている。

### 第2節 歴史的環境

前述のように当古墳群が位置する丹波市には、由良川と加古川の国内で最も低位に分水界があることから、様々な意味で南北交流の経路であったと考えられる。

#### 旧石器時代・縄文時代

丹波市内の遺跡は旧石器時代に遡る。七日市遺跡（春日町）ではAT火山灰層下位から広い範囲で旧石器時代の遺物が出土している。局部磨製石斧が数多く含まれており、分水界が大型動物の季節移動の経路である可能性も含め、大型動物狩猟のためのキャンプサイトではないかと推定されている。

この他に市内では梶原遺跡（市島町）で石器製作跡が検出されているほか、篠山市板井寺ヶ谷遺跡ではAT火山灰層の上下で石器製作跡が検出され、下層ではサヌカイト製石器ブロックとチャート製石器ブロックが併存しており、二つのグループが同一地点を使用していたことが想定される。

縄文時代では国領遺跡（春日町）で草創期の石器製作跡が検出されているほか、下野村遺跡（春日町）、多利小向遺跡（春日町）、梶原遺跡で土器が出土している。

#### 弥生時代

弥生時代に入ると人々の生活痕跡がいっそう明確となる。前期に遡る遺跡では的場遺跡（市島町）、横田遺跡（氷上町）があり、七日市遺跡でも集落の形成が始まる。中期になると七日市遺跡が地域の中心集落として拡大をはじめめる。高速道路建設に伴う大規模調査により、集落城・生產城・墓域が確認されるとともに、大量の遺物が出土している。また、野々間遺跡からは七日市遺跡で祭祀に用いられたと思われる銅鐸2点が埋納された状態で見つかっている。しかし、七日市遺跡は後期に入ると衰退し、そのかわりに

国領遺跡に中心が移っていくようである。また、前述の的場遺跡や横田遺跡でも断続的に集落が営まれており、後期の土器では京都丹波や山陰地方との交流を物語るものが出土している。墳墓では七日市遺跡北側の丘陵上に東山墳墓群（春日町）があり、的場遺跡に隣接する上ノ段遺跡（市島町）でも終末期の周溝墓・木棺墓が見つかっている。

#### 古墳時代

丹波市内の前期古墳のうち、中心的な首長墓と目されるのはわずかで、径 42 m の円墳で三角縁神獣鏡の出土した親王塚古墳（春日町）や全長 48 m の前方後円墳である丸山 1 号墳（山南町）が挙げられるに過ぎない。ただ、丸山 1 号墳は後円部の主体部から大量の鉄製品の他、鏡、車輪石などが出土しており畿内の影響を強く受けた古墳である。また、小首長墓と考えられる古墳に、おさんの森古墳群（柏原町）、萱刈坂古墳群（柏原町）、久良部 1 号墳（市島町）などが挙げられるが、春日町域ではこの時期の古墳は確認されていない。

中～後期に入ると二間塚古墳（春日町）、桂谷寺古墳（春日町）、稻塚大塚古墳（春日町）といった全長 40 m 前後の前方後円墳が首長墳として築かれる。稻塚大塚古墳からは明治から大正時代に刀剣・馬具・玉類などが出土したと伝えられている。また、丘陵部を中心に多数の小規模墳が築造されるものの、野坂大谷古墳群（山南町）、親王塚北野古墳群（春日町）、七ツ塚古墳群（柏原町）などを除けば、数基単位の小規模な古墳群が大半を占める。これらの古墳群には多利向山古墳群（春日町）、火山古墳群（春日町）などのように木棺直葬墳と横穴式石室墳が混在するものが認められる。

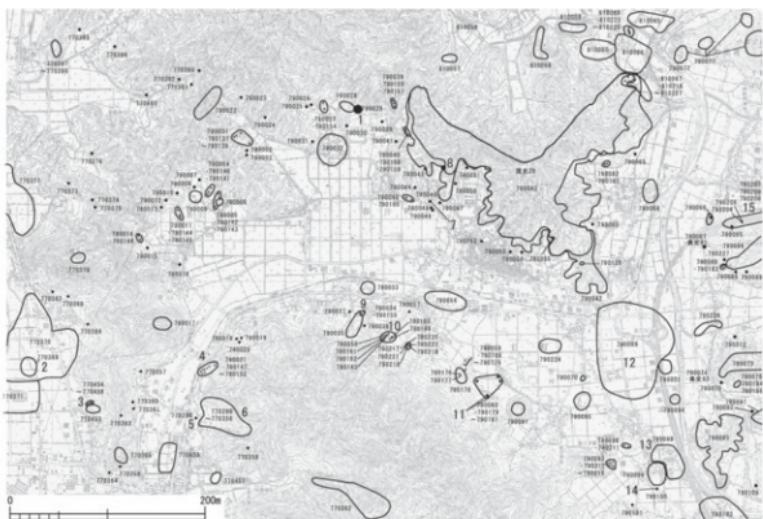
山田大山古墳群と同様、横穴式石室が導入された時期に築かれた古墳も市内に点在して認められる。井原至山古墳（山南町）、梶 1 号墳（山南町）や前述の多利向山古墳群中の C 2 号墳は方形に近い平面形の石室を持つ。井原至山古墳、多利向山 C 2 号墳は MT 15 型式並行期のものと位置づけられるが、後者の方がより原型に近いものと評価されている。これに続くものは坂古墳群（春日町）の 1・2 号墳である。いずれも全長 20 m 前後の前方後円墳で、この地域の首長墓と考えられる。坂 2 号墳から 1 号墳へ変遷し、奥壁に三角隅持ち送り技法を用いた横穴式石室をもつことで知られている。また、棚原桜塚古墳（春日町）からは金銅装太刀が出土しており、丹波市内では唯一の例である。

古墳に比べて、当該期の集落遺跡のことはよくわかっていない。市内では柏原町域で三原遺跡、三原西遺跡、県長遺跡、大新屋遺跡など古墳群とセットになるような集落があり、市島町域では三ツ塚遺跡、上ノ段遺跡、梶原遺跡などがあるが、春日町域では七日市遺跡で前期の住居跡が見つかっているものの、調査例がほとんどない。おそらく、この地域では古墳時代から現在の居住域と同じ場所に移ったため、遺跡が認識されないものと考えられる。

生産遺跡としては鴨庄古窯跡群（市島町）、少し播磨側に入るが黒田庄古窯跡群（西脇市黒田庄村）で須恵器の生産が行われている。

#### 古代

前述のように丹波市は旧国では丹波国に属し、水上郡に相当する。水上郡は養老令の規定では「大郡」にあたり、「倭名類聚抄」によると由良川水系の東縣と加古川水系の西縣に分割されていた。現在の春日町域は東縣の春日郷にある。郡衙は郡名郷である水上郷に置かれていたと考えられるが、東縣にも郡衙に相当する施設が置かれていたと想定されている。郡衙そのものは見つかっていないが、郡衙推定地に隣接する市辺遺跡（水上町）では倉庫と考えられる掘立柱建物群が調査され、皇朝十二銖・銅印、木簡が出土している。東縣の郡衙相当施設には、かつて里長の館跡と考えられていた山垣遺跡（春日町）を七日市



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

遺跡も含めてあてる考え方がある。

古代寺院遺跡は三ツ塚廬寺（市島町）が現在のところ唯一の例である。金堂と左右の塔が一直線上に並ぶ「新治廬寺式」の伽藍配置を持ち、隣接地では寺院に葺かれた瓦を焼いた天神瓦窯も確認されている。遺跡の性格ははっきりしないが、柏原陣屋遺跡の下層から礎石建物が見つかっており、官衙あるいは寺院の跡と考えられる。

生産遺跡としては鴨庄古窯跡群、稻塚窯跡（春日町）のほか、春日町域に野上野窯跡、野上野瓦窯跡、中山窯跡、平松八幡神社窯跡群などがあり、黒田庄古窯群でも引き続き生産が行われている。

#### 参考文献

水上郡教育委員会『水上郡埋蔵文化財分布調査報告書(1)～(5)』 1994～1998年

各遺跡の調査報告書は割愛した。

表1 周辺の遺跡

1. 山田大山古墳群	790029
2. 市辺遺跡	770369
3. 横田北古墳群	770454～770458
4. 坂古墳群	790021・790147～790153
5. 親王塚古墳	770298
6. 親王塚北野古墳群	770299～770356
7. 稲塚大塚古墳	790046
8. 稲塚窯跡	
9. 朝日八幡山1号墳	790034・790155
10. 平松古墳群	790164・790165・790058・790161～790163
11. 火山古墳群	790060・790179～790181
12. 七日市遺跡	790069
13. 山垣遺跡	790098
14. 棚原桜塚古墳	790100
15. 多利向山古墳群	790204・790205

### 第3節 山田大山古墳群の立地と周辺の遺跡（図版1）

ここでは、山田大山古墳群が位置する大山谷川周辺の地形と遺跡について述べてゆく。

砂防堰堤工事を行う大山谷川は標高約383.4mの山頂から南へと流れだす幅3m程度の沢筋である。

大山谷川が開削し、あるいは扇状地を形成する大山谷は、標高154m付近から徐々に開き始め、特別養護老人ホームが立つ標高110m付近に至って漸く幅100mとなる、狭い矩形の谷である。

調査地点周辺の地形の変化は少なく、調査前は杉の植林であった。下流については標高133m前後から水田もしくは畑地として開墾されたと考えられる段状の造成平坦地が両岸で見受けられる。これらの平坦地もまた植林に埋もれている。

山田大山古墳群は今回の調査によって6基の古墳の存在と2基の古墳状隆起（A・B）の存在が明らかとなった。このうち1号墳・2号墳・4号墳・5号墳・6号墳・古墳状隆起Aは大山谷川の左岸、東尾根の西山裾に位置しており、3号墳と古墳状隆起Bは大山谷川の右岸、西尾根の東山裾に位置している。

左岸に位置する5基のうち、5号墳は最奥にあり、標高147m前後、2号墳・6号墳は標高144m前後に位置しており、東側尾根根に沿って位置している。これら3基は、等高線に平行し、南面に開口している。また、下層断ち割り調査の結果、旧沢筋に立地していることが判明している。

1号墳は大山谷が大きく開く、扇状地の始まり、標高137m前後に位置している。2号墳に近い径10m前後の墳丘をもつ円墳である。やはり、等高線に平行し、南面に開口している。

古墳状隆起Aは明らかに横穴式石室墳の残骸であるが、墳丘は消失している。標高135m前後に位置しており、等高線に直交して南西方向に開口している。

4号墳は左岸に位置する古墳のうち最も低所の標高122m前後に位置する。規模は2号墳に近く、巨大な石材が露出する横穴式石室墳である。立地は、2号墳などとは違い、大山谷川本流ではなく、北東から合流する支流の谷筋右岸（北斜面掘）に立地し、等高線に直交して南方向に開口している。

右岸側の古墳は、3号墳と古墳状隆起Bである。

3号墳については、確認調査結果に詳しい。1号墳の対岸、大山谷が大きく開き扇状地が始まる、標高137m付近に立地し、等高線に直交して南方向に開口している。南隣接して若宮神社の記載が工事用図面にはあるが、現況では詳らかではなかった。

古墳状隆起Bは明らかに横穴式石室墳の残骸であるが、東半の墳丘は土地の造成によって消失している。左岸に位置する古墳のうち最も低所の標高123m前後に位置する。等高線に直交して東方向に開口している可能性が高い。残存する石材の上に宝鏡印塔の残欠が存在しており、周間に中世墓が存在した可能性を想起させる。古墳状隆起Bは平成26年度後半期に丹波市教育委員会によって東半部の調査が実施されたが、その詳細は今回の報告書には生かせなかつた。

以上、山田大山古墳群の分布について述べた。古墳群以外に、周辺からは古代から中世後期にかけての遺物の散布が見受けられる。これらは、植林の伐採に伴い運び出しに重機が入れられたことから表土が荒らされ、露出し、採取されたものである。C・D・E地点と仮称しておく。

C地点は標高122m前後の平坦地である。この地点では須恵器壺Bが採取された。時期は5号墳周溝出土土48と同時期と考えられる。

D地点は標高119m前後の平坦地である。この地点では主に瓦器椀片や須恵器捏鉢片・丹波焼片など中世前期を中心とする遺物が採取できた。

E 地点は標高 114 m 前後の平坦地である。この地点では瓦器楕片や須恵器捏鉢片・丹波焼片などと共に瀬戸美濃製天目楕片など中世後期の遺物が採取できた。

F 地点は、左岸側、4 号墳が開口する谷筋の左岸に位置する。標高 119 m 前後の沢筋である。径 3 m 前後の中隆起が見受けられ、石仏が倒れている。この地点に中世後期の中世墓地が存在する可能性が高い。以上、周辺の遺物散布状況について述べた。

これらの遺物（石仏以外）はすべて、当時、古墳状隆起 B の調査を実施していた丹波市教育委員会に現地で提出したため、詳細については今回の報告書には生かせなかつたが、概ね、2 号墳区で出土した古代や中世の遺物が下流の扇状地においても採取できることと、下流に行くにつれて採取した遺物の時期が古代・中世前期・中世後期と新しくなること、特に扇状地の奥に古代の遺物の散布が見られることは重要である。

5 号墳において出土した古代の須恵器杯 B、中世前期の青磁碗や藏骨器の可能性が高い丹波焼甕、あるいは火葬場の可能性のある S X 07、中世墓と考えられる S X 08・S X 09 といった古墳廃絶後の遺構の造営主体が、同じ谷の下流直近に存在した可能性が極めて高いことが、遺物の採取状況から伺われるのである。

## 第3章 確認調査の概要

### 第1節 調査の方法

平成23年の分布調査（遺跡調査番号：2011082）によって、事業地内からは周知の山田大山古墳（遺跡番号：790029）以外に古墳の可能性がある2箇所の集石遺構が確認され、平成25年度に集石遺構についての確認調査を実施した。

また平成26年度の本発掘調査に際しては、調査区北端から新たな古墳、5号墳が検出され、加えて5号墳周辺から龍泉窯の青磁片、丹波焼等が出土したため、調査区の北側に中世墓などの遺構が存在する可能性が浮上したことから、本発掘調査区の北隣の平坦部に2本のトレンチを設定し、確認調査を実施した。両年度ともに掘削は全て人力でおこない、遺構の構造や遺物の有無の確認に努めた。また、掘削完了後図面、写真によって記録を行い、埋め戻して調査を完了した。

### 第2節 調査の結果

#### 平成25年度の確認調査（図版1・2・37 写真図版5・45）

山田大山古墳（1号墳）は沢筋の東に接する。古墳は直径15m、高さ3mほどの規模をもち、北側には周溝が巡る。盛土は上部が流失しており石室の天井石が露出している。古墳の主要部分は工事範囲から外れているが、西側裾部と周溝の一部が砂防堰堤の範囲に入る可能性が考えられる。事業地内で明確な古墳は、この山田大山古墳1基のみであり、分布調査で古墳の可能性が指摘された2箇所の集石遺構は、石材の露出は認められるが、墳丘が明確ではなかった。以下、山田大山古墳の北側にあるものを集石遺構1、西側にあるものを集石遺構2として確認調査を行い、その成果を踏まえて、山田大山古墳を山田大山古墳群1号墳、集石遺構1を同2号墳、集石遺構2を同3号墳と呼称することとした。

**2号墳（集石遺構1）：**西側の斜面と沢の間にある10m四方ほどの緩やかな平坦面に1.0m×0.5mほどの石材が2個並列しており横穴式石室の天井石のように見えるが、墳丘は明確ではない状態であった。集石の構造を確認するために、幅2m、長さ5mの1トレンチを設定し調査した。その結果、地表に露出していた大型の石材の下で、1mほどの間を開けて南北方向に並ぶ石列を確認した。これは横穴式石室の側壁であり、露出していた大型の石材は天井石であると考えられた。石室は南側に開口しており、玄室の内法で幅1.2mであり、長さは5m以上である。この石室を中心と墳丘を想定し周辺の地形を観察したところ、平坦地の南東に幅2mほどの溝状の崖があり、その延長が斜面と平坦地の傾斜変換点となって北東側に続いていることが確認できた。これは周溝の痕跡であろう。墳丘の西側については沢による浸食や土砂の堆積の影響により明確ではないが、石室中心部から8mほど南側に石室の前庭部と思われる平坦地があるので、ほぼこのあたりまでが墳丘の範囲と考えられる。

集石遺構1は横穴式石室を埋葬施設とする直径15m～18mの円墳と考えられる。墳丘は2mほどの高さがあつたと推定されるが、石室が墳丘の低い位置に構築されており、1号墳のような腰高な墳丘ではなく、低平な墳丘であったと思われる。石室は天井石の一部が失われ内部に土砂が流入しているが、残存状態は良好である。遺物はなかつたが、他の古墳と同様6世紀後半～7世紀前半の古墳と考えられた。

**3号墳（集石遺構2）：**付近は地滑りや土取りのために大きく地形が改変されており、大きな崖地の間に石材がわずかに露出している程度であった。集石の構造を確認するために幅2m、長さ3mの2トレンチを設定して調査をおこなった。その結果、地表に露出していた石材は横穴式石室の奥壁と左側壁の一部であることが明らかになった。露出していた側壁の石材の更に南側にも石材が続き、土取りによる崖地の壁にも側壁の石材の一部が認められるので、石室は南側に開口していると考えられる。右側壁の石材はトレンチ内では確認できなかったので、正確な幅は不明であるが、内法で1m程度と思われる。奥壁の石材の際からは須恵器が2点出土した。墳丘は全く痕跡をとどめておらず、地形観察だけでは古墳の範囲が把握できないため、2トレンチの北側に幅1m、長さ4mの3トレンチを設定した。このトレンチでは地山である岩盤を掘り込んだ周溝が確認され、古墳の北端をおさえることができた。

集石遺構2は横穴式石室を埋葬施設とする直径15m程度の円墳であると考えられる。墳丘の西側は土取りや地滑りのために破壊されており、石室は奥壁と左側壁の一部が残存しているのみである。出土遺物や石室の構造から7世紀前半の古墳であると考えられた。

2基の集石遺構がともに6世紀後半～7世紀前半に築かれた横穴式石室を埋葬施設とする古墳であることが確認された。これにより事業地内には以前から存在が知られていた山田大山古墳を含め3基の古墳が存在することが明らかになった。この内、3号墳は設計変更によって損壊が免れたため、工事に影響する2号墳の全体（2号墳区）と、周溝あるいは墳裾がかかる可能性のある1号墳（1号墳区）の隣接部分に調査区を設定し、調査を実施することとなった。

#### 平成26年度の確認調査（図版1・3 写真図版5）

本発掘調査に際し、調査区北端から新たに5号墳が検出された。加えて周辺からは龍泉窯青磁碗片、丹波焼壺等が出土し、5号墳上面からは中世墓状の石組遺構が検出された。以上の点から、5号墳の北隣にある平坦部にも更に古墳や中世墓などの遺構が存在する可能性が考えられた。このため4トレンチ（旧名

試掘1 幅1.5m×長さ8m）、5トレンチ（旧名 試掘2 幅2m×長さ8m）の計2本を設定した。  
**4トレンチ：**5号墳の北側、標高153.4m～150.1mの南向き斜面に設定した。表土下には径5cm内外の角礫を含む4層があり、南端には4層を切って落ち込む砂礫層3層がみられる。3層は、旧谷部を埋める砂礫と考えられる。また、4層の下には粘性をもつ5層がほぼ全面に出現しており、南向きの傾斜面となっている。

**5トレンチ：**4トレンチの北側、標高155.8m～153.6mの南向き緩斜面に設定した。表土下に径5cm内外の角礫を含む6層があり、4トレンチの4層に、南半には6層を切って落ち込む砂礫層5・5’層があり、4トレンチの3層に対応する。旧谷部（古い沢筋）を埋める洪水砂礫と考えられる。

両トレンチとも10cmほど堆積した表土の下は疊混じりシルト層の自然堆積であり、遺構・遺物とも検出されなかった。両トレンチでは、南半に谷部を埋め尽くす砂礫層が見えており、5トレンチから4トレンチの南端を通る谷筋があったと推測され、確認調査地点には遺構が存在しなかったと判断できる。

これら旧谷部（古い沢筋）を埋めた砂礫層は、5号墳や2号墳・6号墳の下層断ち割りトレンチからも見つかっており、概ね現在の谷筋の東側を南流していたと考えられる。

5号墳・6号墳の墳丘構築時に墓域掘方よりも大きく山側を掘削している状況が伺える。おそらく、構築面を安定させるために大きく砂礫を除去したと考えられ、起因する旧谷部の肩が両トレンチの南半において出現したものと考えられる。

## 第4章 本発掘調査の成果

本発掘調査は確認調査の結果を受け、事業予定地内に調査区2箇所（1号墳区・2号墳区）を設定した。

1号墳区は1号墳の北側、沢筋（大山谷川）の左岸に設定した。

2号墳区は砂防堰堤が構築される2号墳を中心に、尾根西斜面から沢筋の東肩までを調査区とした。

調査は表土を機械により掘削し、それ以下については遺構・遺物に注意しながら人力により掘削した。

遺構検出後、個別遺構の写真撮影・図面作成、調査区全体はヘリコプターを使用した空中写真測量を行った。また、5号墳については、ドローンを援用し墳丘および石室内部の詳細測量を実施した。

7月31日には学識経験者（岡山理科大学：亀田修一教授）による現地指導を受けた。

また、2次確認調査区においては、表土から人力で掘削し、遺構・遺物の発見に努め、掘削終了後、写真撮影と土層断面図の作成を行った。

### 第1節 調査区の概要

#### 1号墳区の調査（図版4 写真図版6）

1号墳区は1号墳の北側、沢筋（大谷川）の左岸に設定した北辺3m・南北長約10mを測る、約17m<sup>2</sup>の逆三角形に近い調査区である。調査後の標高は140m～137mに及ぶ。

1号墳の周溝あるいは墳裾が、施工によって影響を受ける可能性があったため調査を実施した。

表土下約40cmにおいて1号墳の墳丘裾につながる傾斜面を検出した。

調査区中ほどに傾斜変換点があり、削平を受けた周溝肩部の可能性があるが、明確な遺構としては検出されなかつた。

また、遺物も出土しなかつた。

#### 2号墳区の調査（図版4 写真図版7）

2号墳区は沢筋（大谷川）の左岸、堰堤本体工事対象区に設定した調査区である。南北36m・東西最大幅16mを測る約650m<sup>2</sup>の釣鐘形の調査区である。調査後の標高は149m～139mに及ぶ。

当地区では計3基の古墳と石棺墓、集石遺構などを検出した。最も標高の高い北端に5号墳、中央に2号墳・6号墳、南端にS X 07が検出されている。

各古墳にかかる土層は後述する。大まかには最下層に径20cm前後の巨礫を内包した東尾根から西側へと傾斜する地山面があり、その上面に中央から西側へ、古墳構築前の旧沢筋、古墳構築後の沢筋、更に現在の大山谷川と堆積が変遷している。

## 第2節 遺構

### 2号墳

**外部施設** (図版5～12、写真図版9～13)

**立地と検出状況** 2号墳区のほぼ中央に位置する円墳である。標高146m～142mの間に位置している。

尾根の南西斜面を大きくカットし、先行する6号墳の墳丘を掘り崩し、構築している。天井石3石が原位置を保たない状態で検出された。

周溝の北側については、近世には、墳丘を掘り崩して埋めたてられ、平坦面を造り出していたと考えられる。この平坦面上には寛永通宝を伴う焼土坑群が営まれている。

**規模** 南北長17.5m、東西幅16.5mのほぼ円形に斜面をカットあるいは周溝を掘削し墳丘基底部を削り出している。図上で計測する限り、掘削の中心線は石室左側壁の線と合致している。

**周溝** 周溝は削平のため場所によって幅・深さともにばらつきがあるが、斜面側で、周溝肩から墳丘裾までが約4.5m、深さは1.5mを測る。周溝は墳丘の周りを円く巡っているが、特に下方側は深く、馬蹄形に掘削されており、墳頂を際立たせている。その幅は約3m・深さは墳丘側から0.7mを測る。

**墳丘** 南北長12.0m、東西幅11.0mのほぼ円形を呈している。残存する高さは、北端の墳頂部で残存する墳丘の高さは周溝底から約90cmである。先に述べた近世の掘り崩しによるためと考えられる。

**構築について** 2号墳墳丘は、6号墳墳丘を損壊し、6号墳周溝を埋めて構築している。墳丘の断ち割り土層断面を検討したところ、墓塙を掘削し、石室壁面の最上部付近まで更に盛り上げ、内護石を備えた1次墳丘を構築した可能性が高い。天井石架構後、更に盛り土を施し2次墳丘を構築し、列石を裾に巡らせていたと考えられる。2次墳丘の盛り土には、径10cm内外の角礫が多量に含まれている点が特徴である。6号墳の周溝・墳頂部を埋めて2号墳の墳丘を構築したことが、大礎の分布から推定できる。

**内部主体** (図版13～15、写真図版14～17)

**検出状況** 主体部は漠道の一部が後世の削平を受けているものの、無袖の横穴式石室である。大型の石材を用いた天井石3石が残存していたが、いずれも原位置はとどめていなかった。石室は構築時に6号墳石室の東側壁の基底石を残して損壊し、西側壁の基底石を6号墳基底石上に据えている。6号墳よりも新しく、石室中軸はN 13° W、6号墳石室と鋭角にクロスして造られている。

**墓塙** 6号墳の石室と重複して石室を構築しているため明瞭ではない。石室の南半については墓塙を伴わなかつた可能性が高い。北半については奥壁と左側壁側は6号墳墳丘を、右側壁側は6号墳石室内を掘り込み、概ね幅2.2m・長さ3m・深さ0.7mのコの字形に墓塙を掘削している。奥壁と墓塙壁の間は約80cm空いているが、側壁と墓塙壁の間は約20cmと狭い。

**石室** 石室の規模は現存長4.7m（東側壁）、幅1.0m、現存高約1.1mを測る。奥壁から漠道側へ1m程度の範囲には平たい石材を床面に敷いている。

奥壁は基底部に石室幅よりやや小さい鏡石を置き、東隅には縦方向に小型石材を挿入する。2段目からは小型の石材を横方向に積み上げるが、鏡石の上辺の凹凸があるため、目地はそろっていない。東側壁は基底石として長さのそろった石材を横置きしている。ただ、残存している壁面の入り口から2石目は縦に石を置いているので、玄室と漠道の境界になる可能性もある。2段目以上は奥壁と同様石材の大きさにばらつきがある。西側壁は東側ほど基底部の石材の大きさはそろっていないが、石材を横置きし、目地を通してこれを意識している。残存状況はよくないが、2段目以上は他の壁と同様に石材を積み上げている。

肉眼観察によるが、石材は斜面上方や沢筋に露頭しているものを用いていると考えられる。

床面には奥壁前を中心に敷石が固まって認められ、追葬時のものと考えられる。

#### 出土遺物（図版 33・34 写真図版 40～42）

石室内、主に羨道（羨門周辺）部分からは追葬時のものと考えられる須恵器壺蓋（1～3）と須恵器蓋（4）、玄室に少し入ったところで須恵器蓋（5）、玄室敷石下より劍もしくは鐵鏃茎部片（M1）が出土している。

また、石室の破壊された部分などで同時期かやや古い环身や短頭壺（11）の破片が出土している。

また、墳丘中や周溝内から 6 世紀半ばころの壺や高壺の破片が出土している。

#### 時期

羨道（羨門周辺）の土器は 7 世紀後半に属する。

#### 備考

墳丘中や周溝内から 6 世紀前半から半ばの壺や高壺の破片が出土している。6 号墳に伴う遺物である可能性が考えられる。

#### 6号墳

##### 外部施設（図版 5・7～11・16 写真図版 9・10・14・17～20）

**立地と検出状況** 2 号墳石室の構築により、石室東側が大きく壊された横穴式石室墳である。墳丘・周溝ともに 2 号墳墳丘内に埋設している。古墳は尾根の南西斜面と旧谷筋上に構築されている。

**規模** 2 号墳に損壊され、規模は詳らかではない。概ね周溝・墳丘を含め南北 9 m 前後のほぼ円形に斜面をカットあるいは周溝を掘削し墳丘基底部を削りだしている。

**周溝** 周溝の内、東から南側を巡る部分が、断ち割りトレンチ C-C' と 2 号墳左側壁下の状況から復元できる。C-C' 部分では、幅 1.5 m 前後・深さは 35 cm 以上で掘削されており、2 号墳石室羨門部下層から検出された 6 号墳列石前面が幅 1 m 前後で浅く埋んでいることから、斜面山側から羨門付近までは周溝が巡っていたと考えられる。斜面沢側については不明である。

**墳丘** 墳形は円形、南北・東西長とともに約 7 m を測る。斜面谷側を中心に外護列石・墳丘内列石（内護列石）が巡る。残存する墳丘の高さはトレンチ C-C' で周溝底から約 60 cm、B-B' で看取できる墳丘裾部からも約 60 cm である。

**構築について** 墳丘の谷側（南西側）から南側羨門付近にかけては径 20 cm～60 cm の巨礫が多数見受けられる。これらは墳丘埋土中にランダムに含まれていたのではなく、墳丘構築に伴って積まれた外護列石あるいは墳丘内列石（内護列石）であったと考えられる。墳丘盛土には径 20 cm 内外の角礫を多量に含んだシルト混じりの細砂～中砂を使用している。

図上で計測する限り、構築された墳丘の中心線は石室左側壁の線と合致している。

墳丘の基底部はトレンチ C-C' の状況から推測する限り、斜面に盛り土を一旦行い、水平面を造り出した後、大きく山側を地山までカットし、墳丘の構築を行っている。同様の作業は 5 号墳においても見られる。この作業の性格は不明であるが、単なる墓壠の掘削ではなく、下層にある旧沢筋の堆積層の脆弱さを解消するためではないかとも考えられる。斜面谷側に設定した墳丘断ち割りトレンチでは旧地表と考えられる第 7 層上面が被熱しており、炭化物が認められた。その標高は 143.4 m～143.5 m である。これは築造時に行われた野焼きの痕跡と考えられる。

また、6 号墳の墳丘を除去したところ、石室右（西）側壁の外側のほぼ基底石底面と同じレベルから破

碎された土師器の甕（37・38）が出土している。これは築造時の祭祀に伴うものではないかと思われ、破碎された土器の標高もまた、143.5 mである。

**備考** 2号墳渓門部下層の石列が6号墳の南側の列石と考えられる。

**内部主体**（図版13・16～18 写真図版9～11・13・17～20）

**検出状況** 石室は2号墳石室と鋭角にクロスしており、先行する。左側壁が2号墳の石室床面下もしくは2号墳右側壁直下にあり、2号墳構築時に損壊され、左側壁は基底石を残して無くなっている。

**墓 墓** 奥壁側及び左側壁側の背面を地山面まで掘り込み墓壙を造り出している。右側壁側は詳らかではないが、B-B'の断面では盛土を35cmほど掘り込む墓壙が確認されている。斜面谷側を盛土し、基底石を据える深さにコの字型に墓壙を掘削したと推測される。

**石 室** 石室は漠道および基底石を除く東側壁が2号墳築造時に破壊されているものの、無袖の横穴式石室である。石室の主軸はN5°E、2号墳の石室に対して、東に18°振っている。

石室の規模は残存長約4.8m、幅0.8m、現存高1.0mを測る。床面には奥壁から漠道方向へ約1mの範囲に追葬時のものと思われる角礫を敷いた礫床が残る。

奥壁は基底部にも比較的小さな石材を用い、鏡石は置かない。用いられた石材も大きさや厚さに規格性は認められない。上部に行くにしたがって、内側にせり出すように石を積んでおり、東西両側壁との接点については一部の石材を側壁にかませる技法を用いている。東側壁は基底石としておおむね厚みのない板状の石材を用いているが、漠道と考えられる部分と側壁の一部には厚みのある石材を用いている。西側壁も概ね東側壁と同程度の石材を用いている。ただ、意図は不明ながら、漠道との境界付近に巨石を1石用いている。

6号墳も2号墳と同様、斜面上方や沢筋に露頭している石材を用いていると考えられる。

**出土遺物**（図版35 写真図版40・43）

玄室の礫床上から須恵器壺蓋4点（27～30）、須恵器の坏身4点（31～34）、須恵器壺（35）、土師器小型甕（36）が出土した。壺蓋と坏身はセットで副葬されていたと考えられる。そのうちの3組は蓋と身を重ねた状態で伏せて置かれていた。

また、墳丘を除去した際、西側壁の外側のほぼ基底石底面と同じレベルから破碎された土師器甕（37・38）が出土している。築造時の祭祀に伴うものではないかと思われる。

**時期** 玄室の礫床上の土器は6世紀後葉に属する。

**備考** 2号墳の項でも述べたが、2号墳と重複する墳丘や周溝から6世紀前半から半ばの須恵器が出土している。

## 5号墳

**外部施設**（図版4・19～24 写真図版21～23）

**立地と検出状況** 調査区北東部に位置する。古墳は尾根の南西斜面と田谷筋上に構築されている。

当初は古墳ではなく、集石遺構などが複数基並まれた中世墓地の存在を考えていた（S X 01）。

5号墳は2号墳の北側に位置しており、2号墳の周溝の掘削によって、南東側から南側の石室前庭部にあたる部分が消失している。また、南西側については大山谷川の浸食によって周溝・墳丘の一部が削られている。

これら2号墳や沢筋の影響に加え、5号墳の墳丘上には中世墓と考えられる石組S X 02・S X 08・S

X 09 やピット群が営まれており、加えて出土遺物から鎌倉時代に干渉を受けた可能性が考えられる。また、2号墳と同じく近世の造作によって墳丘は掘り崩され、更に近代以降の植林に伴う造成が加わり、現況では微かな隆起となって残存していたととらえられる。

**規 模** 墳丘は2号墳や集石遺構が営まれたことにより、かなり変形を受けているが、周溝も含め直径約13.5 m程度の不整な円墳であったと考えられる。

**周 溝** 周溝は削平のため場所によって幅・深さともにばらつきがあるが、斜面山側を弓形に近い（半）円形に掘削し、造り出している。規模は、斜面山側で、周溝肩から墳丘裾まで約2.6 m、墳丘の肩では3 mを測る。深さは山側肩部から約1 mを測る。また、検出できる最も下流では周溝肩から墳丘裾までが約2.8 m、墳丘の肩までは3.5 mを測る。

**墳 丘** 墳形は改変のため明確ではない。特に、南西半は大きく消失している。周溝が円弧を指向するに対し、残存する墳丘の東西辺は円みをもち、対して北辺は直線的である。北辺の直線は中世に入って生じた可能性が高いが判然としない。不整な円形もしくは、隅丸方形であった可能性も若干残る。円墳の場合、ほぼ南北軸で9.0 mを測る。これは、10 cm前後の角礫が多く入る、比較的残りの良い墳丘部分で計測した場合である。また、石室の東西・南北辺を基準に測りだすと、南北約8 m以上、東西約8.5 m程度の規模となる。また、方形の場合、東西辺8.5 m、南北辺7.6 m以上の規模となる。残存する高さは、北端の墳裾部で残存する墳丘の高さは周溝底から約40 cm、東側では約50 cmである。

#### 構築について 斜面谷側を中心に集石・石積みが巡る。

墳丘の谷側（南西側）から南側、漢門を中心とした石室前面には径20 cm～60 cmの巨礫が多数見受けられる。これらは墳丘埋土中にランダムに含まれていたのではなく、墳丘構築に伴って積まれた外護列石あるいは墳丘内列石（内護列石）であったと考えられる。石積みは石室の構築にともなって順次積み上げられたものである。

また、南北軸よりも西側の墳丘盛土には径10 cm～20 cm内外の角礫を多量に含んだシルト質極細砂を使用している。これは5号墳の全体図の状況を見ても明らかである。

墳丘の基底部は各断ち割りトレーナーの状況からみると、斜面に盛り土を一旦行い、水平面を造り出した後、大きく斜面山側を地山までカットし、墳丘の構築を行っている。同様の作業は6号墳においても見られる。この作業の性格は不明であるが、単なる墓壙の掘削ではなく、下層からは旧沢筋の堆積と考えられる砂礫層が出現しており、堆積層の脆弱さを解消するためではないかとも考えられる。掘り込みの肩は、D-D' と E-E'・F-F' で確認されており、C-C' では肩部が検出されていない。のことから、斜面谷側を大きくカットし、墳丘を構築したものと考えられる。この範囲は、多量の礫が目立つ墳丘盛土の範囲とはほぼ合致している。

#### 内部主体（図版25・26 写真図版24～30）

**検出状況** 埋葬主体である石室についても前壁から漢道にかけての石材が南側に向かって崩落している。石室前面を中心に墳丘に墳丘内列石を持つ可能性が高いが、崩落した石室石材との岐別は困難である。

**墓 壕** 6号墳と同じく奥壁側及び左側壁側の背面を地山面まで大きく掘り込み墓壙を造り出している。

**石 室** 石室は平面形が「T」字を呈する両袖の横穴式石室である。奥壁幅が内法で2.35 m、前壁が同じく2.70 m、東壁が1.25 m、西壁が1.15 mを測り、最も残りの良い部分で高さは約1.2 mである。漢道はかなり崩れているので明確ではないが、幅0.7 mとかなり狭く、長さについては不明である。前壁の中央ではなく東によった位置に作られている。方位は玄室西壁でN 20° E、漢道部西壁でも玄室西壁で

N 20° E にとる。

前壁から西壁、奥壁西端にかけては、基底部にあまり厚みのない石材を縱位に用い、小さな石材を横位にしてその上に積み上げている。奥壁の大部分は石材を横位に並べ、西壁は基底部から上まで石材を平置き（横置き）して積み上げており、一つの石室の中で用石法が異なっている。

また、理由は定かではないが、前壁を内側に積み足しており、当初の石室は東壁で約 40 cm、西壁で推定 60 cm 程度狭道方向へ広がっていたと考えられる。

#### 出土遺物（図版 36 写真図版 40・44）

東壁の前から須恵器の环身・环蓋 2 組（39～42）、有蓋高杯（43・44）、甕（45）が出土した。

环・甕は床面から出土したが、有蓋高杯は床面より高い位置にある東壁の窪みにはまつた状態で検出された。环蓋内の埋土と床面の埋土を水洗した結果、滑石製白玉が破損したものも含め、20 点検出された。そのほかには、床面から刀子（M2）が出土している。

また、北側周溝内からは須恵器甕底部（58）が出土している。

#### 時期

須恵器は环の形態から複数型式が含まれていると考えられるが、石室自体の形態とも勘案して、構築時期は 6 世紀前葉としておく。

#### 石棺墓 S X 10（図版 27・37 写真図版 31・45）

検出状況 2 号墳周溝南端より検出した。

検出状況から推して 2 号墳周溝より古く構築され、6 号墳よりは新しい可能性が高い。

墓壙内に 2箇所の石組があり、北半を S X 10a、南半を S X 10b とした。同一墓壙内にあり、S X 10b は石組がずり落ちた態をなしていることから同一石棺であったととらえている。

墓 壙 楕円形で、南北 2.8 m・東西 1.6 m 以上を測る。

石 棺 S X 10a は北小口と東壁の一部が残存しており、北小口は板石を立て、東壁は板石ではなく、割石を 2段に積んでいる。西壁は 2号墳周溝掘削に伴い損壊したと考えられる。N 0° E 前後の走向をもち、残存する全長は内法約 0.7 m・残存幅 0.3 m・東壁の残存高は 0.5 m を測る。また床面には径 10 cm 前後の縦を敷いている。

S X 10b は東壁の一部らしき 2 石と南小口と東壁の一部が残存しており、西壁は 2号墳周溝掘削に伴い損壊したと考えられる。用材が原位置から動いているため参考となるが、凡そ N 9° E の走向をとり、残存する東壁の全長は内法約 0.65 m・残存幅 0.4 m 前後・東壁の残存高は 0.4 m を測り、用材は立てて使用している可能性が高い。

遺 物 石棺の埋土（上層）からは 7 世紀初頭前後の須恵器环底部（46）が出土している。

備 考 墓壙の南半に用材と考えられる石材 S X 10b が存在することから、石棺は内法全長 2 m 前後の規模であったとしたが、S X 10a の側壁と敷石が揃って遺存した状態であるのに対し、S X 10b には敷石がなく、軸もずれ、用材の使用方法も異なることから、両者は別の小石棺あるいは小石室であった可能性がある。

#### 不明石船遺構 S X 11（図版 28 写真図版 32）

検出状況 5 号墳と 2 号墳周溝の間より検出した。標高 145 m～144.5 m 付近に位置する。石組の一部は

2号墳周溝埋土の上面に乗っており、2号墳より新しい石組である。検出された地点は調査区の中央西端に近く、沢筋に向かって50cmほどの段落ちが認められる地点である。検出された石組もまたこの段落ちと向きを同じくしている。

**概要と規模** 石組は径30cm～50cmの石材が2段2列に並び、N50°Wの走向をもつ。全長2m・幅約1mを測る。2段の石材は積み上げた状態ではなく、傾斜に沿って貼り付けた状態で検出されている。基底部からの高さは約70cmを測る。

**遺物と時期** 石組間から土器片が出土しているが、細片であり、時期は不明である。

**備考** 石組は、旧地形の斜面とも、2号墳の周溝の形状ともその向きが合致しておらず、調査前の植林に伴う造成の段と向きをほぼ同じくしており、段落ちに伴う護岸の石組である可能性が考えられる。

#### 奈良時代の遺物（図版37 写真図版45）

5号墳東周溝内より須恵器壺B（48）が出土した。8世紀後半と考えられる。本調査区よりも下流の谷入口付近の扇状地では同時代の須恵器が採集されており、奈良時代～平安時代にかけての集落が存在した可能性が高い。同時に5号墳周辺で、祭祀などの活動が行われた可能性が考えられる。

#### 中世墓状石組遺構S X 08（図版20・29 写真図版32・33）

**検出状況** 5号墳西墳丘上にある。

**形状・規模** 南北約1.2m・東西約0.9mの長方形の石組みである。長辺の方位をN30°W前後にとる。一边40cmほどの自然石を並べ、西外側に面をもつ。石組み内には南北約1.1m・東西約0.8m・深さ約25cmの不整形方の土坑がある。

**遺物** 遺物は出土していない。

**備考** これらの石組みは火葬墓の可能性が考えられる。

#### 中世墓状石組遺構S X 09（図版20・29 写真図版34）

**検出状況** 5号墳西側周溝上より検出された。周溝埋没後に造られている。

**形状・規模** 一边0.7m～0.8mの方形石組みが2基南北方向に連結しているものと考えられる。長軸の方位をN40°W前後にとる。石組みは一边15cmほどの自然石を並べているが、西辺は縦じて崩落し不分明である。石組みの下から土坑等の施設は見つかっていない。

**遺物** 遺物は出土していない。

**備考** これらの石組みは火葬墓の可能性が考えられる。

#### 中世墓状の集石遺構S X 02（図版20・30 写真図版35）

**検出状況** 5号墳東墳丘上より検出した。一部周溝上にかかり、周溝が埋没したのちに造られている。

**形状・規模** 径約80cmの円形の土坑に径10cm前後の角礫が密集している。土坑は浅い皿状の土坑底に直径15cmほどの穴が開いており、全体として漏斗状の形状である。

**埋土** 角礫は主に上半にあり、礫間に褐色の細砂質極細砂が入っている。

### ピット群・焼土坑群・丹波焼甕・銭貨 (図版 20・30・37 写真図版 35・36・45)

5号墳墳丘上からピット群、西側沢筋からは丹波焼甕が出土している。中世墓と考えられるS X 08・S X 09を含め、周辺に火葬墓(址)があつた可能性が高い。

また、2号墳の墳丘上及び周溝にあたる部分の上層から焼土坑、石組み遺構、寛永通宝3点、鉄製の猿が出土している。石組み遺構は今回報告しなかつたが、2号墳周溝上に位置し、現地表上に額をみせる石組みである。また、周辺より上述の寛永通宝3点のうち2点や鉄製の猿像が出土しており、庚申信仰などの近世遺構が存在した可能性が考えられる。

・ピットP 01～P 03 5号墳の墳丘上において3基のピットを検出した。何れも径50cm前後、深さ5cm～15cmを測るもので、径10cm前後の石が落ち込んでいる。周辺からは龍泉窯劃花文青磁碗片が出土しており、鎌倉時代に墳丘上が使用されたと考えられる。

・焼土坑S X 03～S X 06 5号墳南東、2号墳周溝上に位置する。S X 03～S X 05はまとまって検出されている。

S X 03は上部に集石を持ち、炭が一部に充満しているS X 03-Aと炭混じりの黒褐色細砂が入るS X 03-Bの2基に分かれる。S X 03上及び周辺からは寛永通宝が2点出土している。

S X 04は径60cmの不整円形の土坑である。上部に甕が集まり炭を含む黒褐色細砂を埋土とする。

S X 05はS X 04と同じく炭を含む黒褐色細砂を埋土とする椭円形の土坑が2基連結する瓢箪形の土坑である全長1.6m・幅40cm前後を測る。

S X 06は被熱し、赤変した不整な椭円形の土坑である。全長70cm・幅50cm前後を測る。

・丹波焼甕(47) 5号墳西側の沢筋より丹波焼甕口縁部が出土している。時期は13世紀代と考えられる。甕の存在から5号墳丘上もしくは沢筋上部に中世墓もしくは経塚が存在した可能性が考えられる。北東の至近にはS X 08・S X 09が存在する。

・銭貨 表土直下から銭貨3点が出土した。うちM 3・M 4は5号墳南側、M 5はS X 03周辺から出土している。何れも寛永通宝である。

### 火葬址遺構S X 07 (図版4・31・32 写真図版37・38)

2号墳の南側、調査区南端の沢筋に巨石(自然石)による岩陰がある。岩陰は一辺1m～1.5mの巨石4つが東西に並び沢に向かって底を造り出している。その底の下から石敷きと石壁を積みあげた火葬址と考えられる遺構を検出した。

遺構は岩陰の前面を東西3m×南北2.5mに亘って掘り下げ、中央に石壁を立てることによって、2室に分け、火葬炉と考えられる施設を造っている。西側の施設をS X 07-A、東側の施設をS X 07-Bとする。

・S X 07-A 床には上下2枚の石敷きがある。石敷きの他、奥壁・左側壁が残存し、右側壁、前面(沢側)の構造は上下面とも詳らかではない。

〔下層〕全長1.6m以上・幅約0.9m前後、高さ0.7mを測る石敷き遺構。長軸の方位をN 20° Wにとる。

床面に幅0.2m前後の石を横5列、縦7列に敷き、岩陰側(奥壁)に2段3列の石壁を積み石室を造り上げている。

奥壁の壁は下段には規模の大きな石材を立てて使用し、上段には人頭大以下の石材を底部の岩陰との間に詰め込んでいる。

中央を仕切る壁(側壁)は板石を立て、更に1段石材を積む。この壁は上層においても使用され、また

壁の板石は両面とも平坦であることから、S X 07-B側の壁としても使用されたと考えられる。

床面・側壁・奥壁及び底部の岩間の一部は被熱し、赤変している。石室内で燃焼行為が行われ、底の岩の間が突出しとして機能していたと考えられる。

〔上層〕全長1.8m以上・幅約0.8m前後、高さ0.5mを測る石敷遺構。長軸の方位をN 19° Wにとる。

下層床面との間で約10cm、奥壁との間で約5cmの間をあけて新しく石材を組上げており、間には炭を含んだにぶい褐色土が堆積している。

床面に幅0.2m前後の石を横5列、縦7列以上敷き、奥壁には2段5列の石壁を積んでいる。

床面・奥壁ともに被熱し、赤変している。下層と同じく石室内で燃焼行為が行われたと考えられる。

・**S X 07-B** 岩陰を奥壁とし、S X 07-Aと分ける中央の壁を右側壁としている。左側壁については石材が一石残存している。前面（沢側）には2段の石積みが残り、S X 07-Bの前壁もしくはS X 07-Aを含めたS X 07全体の前壁であったと考えられる。前壁までの全長2.7m・幅約0.8mを測る石室状遺構である。長軸の方位をN 20° Wにとる。

S X 07-Aと違い、床面・両側壁・奥壁・前壁ともに被熱・赤変は見受けられず、燃焼行為が行われた可能性は低い。またS X 07-Aの上層時には埋没していたと考えられる。

S X 07の上面からは須恵器片が出土しているが、遺構の時期は特定できない。

### 第3節 遺 物

#### 2号墳の出土遺物 (図版33・34 写真図版40~42)

1・2・3は須恵器の坏蓋と判断した。いずれも口縁部の高さが低くなり、天井部との境界が不明瞭になりつつあるとともに口径も小さくなっている。1・2の天井部は丸みを帯び、3はやや平坦になっているが、いずれもヘラ削りは頂部のみである。3点とも完形である。4・5は蓋である。4は大きく開く口縁部と肩の張る体部に外側に踏ん張る高台が付く。頭部に2条の沈線を巡らせる。打ち欠かされたように破損している口縁以外は残存している。5は焼け歪みと火燐で変形が著しいが、ほぼ直立する頭部を持つ蓋である。高台はつかず、中央がくぼんだ平底である。完形である。これらの須恵器はTK209型式の新しい段階からTK217型式に併行するものと考える。

6~13は漢道入り口付近から西壁の崩れた付近を中心に出土した須恵器である。6は焼けひずんだ坏身で平底、ヘラ削りは底面だけに施されている。7については蓋である可能性もあるが、身として固化した。口縁は低く、受け部が湾曲する小型のものである。8も小型の坏身である。9・10は平底から内湾して立ち上がった体部から屈曲して直線的に立ち上がる口縁部を持つ塊である。11はひずんでいるが胴の張る体部を持つ短頸蓋である。12は甕の口縁部で端部外面を肥厚させている。13は口縁部を欠くものの、蓋の体部である。肩部から胴部中位にかけて4条の沈線を施し、その間を櫛状工具による連続刺突文で充填する。51は写真だけをあげた須恵器坏である。10と同じく前庭部から出土した。

14~26は墳丘・周溝を検出す過程で出土したものである。21~23については、墳丘盛土内から出土している。出土状況から考えて2・6号墳だけではなく、5号墳に伴っていた可能性もある。

須恵器(14~19・22・23)と土師器(20・21・24~26)がある。14は残存状況が悪い有蓋高杯の蓋である。天井部と口縁部の境界は明瞭である。15は坏蓋である。口縁が開き気味ではあるが、天井部と口縁部の境界は明瞭であり、口縁端部に内傾した面を持つ。16は器高が低く、平底の坏身である。17・18は短脚有蓋高杯の脚部である。どちらも長方形と考えられる透かしがある。19は細い脚柱部から大きく広がる裾部を持つ高杯の脚部である。20は甕の口縁部である。端部内面を下方に肥厚させる。21は杯である。22は坏蓋である。天井部のヘラ削りは範囲が狭くなっているが、口縁部との境界は明瞭で内傾する口縁端部にはくぼみが残る。23は坏身である。斜めに立ち上がる口縁部を持ち、端部は内傾した面を持つ。24~26は甕である。いずれも大きく外反する口縁部を持ち、外面にハケ、内面にはヘラ削りを施している。24と25はやや小型のものである。図示した土器以外に52・53をあげた。

周溝や墳丘周辺で出土している須恵器はおおむねMT15型式併行のものが多くを占めるが、16・19のように時期が下るものも含まれている。

M1は玄室敷石下より出土した鐵もしくは鉄劍莖部片である。断面は両刃状である。

#### 6号墳の出土遺物 (図版35 写真図版40・43)

27~30は須恵器の坏蓋、31~34は須恵器の坏身である。坏蓋はいずれも口縁部の高さが低くなり、天井部との境界が不明瞭になりつつある。ほぼ均質な形態を持ち、同一型式と考えられる。35は須恵器の小型蓋である。球形の体部と外反して開く口縁部を持ち、形態的には土師器甕に近い。須恵器の時期についてはTK43型式併行のものと思われる。36は土師器の小型甕である。球形の体部と直線的に伸びる口縁部を持つ。外面はハケ調整、内面はヘラ削りである。37・38は土師器の甕である。球形の胴部に外

反する口縁部が付く。外面はハケ調整で、37は内面もハケ、38は内面にヘラ削りを施している。

#### 5号墳の出土遺物 (図版 36 写真図版 40・44)

須恵器 (39～45) と鉄器 (M 2)、玉 (J 1～J 15) が出土している。須恵器はいずれも完形である。39～42は壺で39・40と41・42がセットになる。39は壺蓋で天井部全体にヘラ削りを施し、天井部と口縁部の境界は明瞭な段で区別される。口縁端部は内側に斜めの面を持つ。40は壺身で口縁部は斜めに立ち上がり、口縁端部は内側に回線状の窪みを伴う面を持つ。受け部は短く、底部から体部下半にかけてヘラ削りを施している。胎土にやや大きな砂礫を含み、成形時のゆがみが認められるなど精良さに欠けるが、形態的にはTK 47型式併行と考えられる。41は39に比べると口径が増大し、天井部のヘラ削りの範囲が減じる。天井部と口縁部境界の段差も鈍くなるが、口縁端部は内側に明瞭な面を持つ。42も40より口径が増大するものの、器高は低くなる。口縁端部も内側に面を持つが回線状の窪みは不明瞭となる。MT 15型式併行と考えられる。43・44は小型の有蓋高壺である。蓋には扁平なつまみが付き、壺部は外受け部直下に櫛描き波状文を施し、内溝する脚部には円形透かしがあり、脚端部は外側に肥厚する。口径に比して蓋・身とも器高が高く、口縁端部は丸みを帯びている。類例を見ない形態があるので、時期比定が難しいが、MT 15～TK 10型式併行と考えられる。

M 2は刀子と思われる鉄製品である。刀部断面を見ると片刃で、茎部は四角い断面を呈する。

玉はすべて滑石製の白玉である。ブロックに分割して取り上げた埋土を水洗選別して検出した。おおむね東側前壁付近から出土している。直径は均質だが、断面形状を見ると上面と下面が平行しないもの多く含まれている。

#### その他の出土遺物 (図版 37 写真図版 45)

46は須恵器壺Gの底部である。底部はヘラ切り、壺部との境はロクロナデ調整を施す。7世紀前半と考えられる。

47は5号墳西側の沢筋より出土した、丹波燒甕口縁部である。口縁端部は外反し、摘み上げ、外側に面をもつ端部は垂下しない。端部内面には回線が巡る。時期は13世紀代と考えられる。

48は2号墳北東側周溝内より出土した須恵器壺Bである。復元口径 15.4 cm・高さ 3.6 cmを測る。壺部は外方へ真っ直ぐ伸びる。高台は底部・壺部境に付き、短く外側へ踏ん張りをみせる。8世紀後半代と考えられる。

49は須恵器壺底部である。2号墳区から採取された。ロクロ糸切りを施した厚い底部から真っ直ぐ体部が立ち上がる。外面には自然釉がかかる。古代末～中世のものである。

50は3号墳床面から出土した須恵器台付長頸壺である。口縁部はラッパ状に開き、肩部には刺突文が巡る。時期は7世紀前半と考えられる。

写真のみ挙げたが、59は律令期の須恵器皿B、60は中世前期の龍泉窑劃花青磁碗片である。

M 3・M 4・M 5はいずれも2号墳・5号墳の焼土坑群付近から出土した寛永通宝である。

M 6は2号墳裾部から出土した鉄製の猿である。庚申信仰に関連したものと推測している。

表2 遺物観察表1

順番 番号	回復 番号	平成国語 番号	種別	器種	法量 (cm)				残存状況			出土 場所	出土遺構	層位	備考	
					口径	腹高	底径	側径	G縫	底	他					
1	33	41	直底器	环面	16.2	3.7			完形			2号壙C	2号墳石室		土器2 (取9上) (7‰)	
2	33	41	直底器	环面	9.6	3.8			完形			2号壙C	2号墳石室		土器3 (取9上) (7‰)	
3	33	41	直底器	环面	10.1	3.2			完形			2号壙C	2号墳石室		土器4 (取9上) (7‰)	
4	33	41	直底器	蓋	18.30	19.75	10.6	15.2	1/2 傷	完形		2号壙C	2号墳石室		土器5 (取9上) (7‰)	
5	33	41	直底器	蓋	3.35	19.5	7.65	14.6	完形	完形		2号壙C	2号墳石室		土器5 (取9上) (7‰)	
6	33	41	直底器	环身	16.7	4.8	6.0		1/4	完形		2号壙C	2号墳西門付近			
7	33	41	直底器	环身	(11.23	3.1					1/4	2号壙C	2号墳東門西側 列石間		断面写分合	
8	33	41	直底器	环身	8.0	2.9			5.6	完形		2号壙C	2号墳石室人骨 旗下			
9	33	41	直底器	環	9.2	4.7			1/4	完形		2号壙C	2号墳石室西 側		6号墳石室西	
10	33	41	直底器	環	(10.33	4.4			1/3	E・P・S		2号壙C	2号墳前庭部			
11	33	41	直底器	短筒壺	6.0	7.2		(10.9)		注溝充形	口～体 1/2弱	2号壙C	2号墳右侧腰外側		等高あり	
12	33	41	直底器	壺	(16.2)	(6.6)					1/3	2号壙C	2号墳石室			
13	33	41	直底器	壺		(13.2)			18.9		注溝充形 体部1/3	2号壙C	2号墳同様			
14	34	42	直底器	有蓋高脚 壺	(11.40	(4.8)				ナガハシ		体部1/4 火葬4/5	2号壙C	2号墳南西阿若		
15	34	42	直底器	环面	(11.6)	4.2				1/8		2号壙C	2号墳南西側圓溝			
16	34	42	直底器	环身	(11.3)	3.8	(5.3)		1/5			2号壙C	2号墳同様	深側アゼ		
17	34	42	直底器	有蓋高脚 壺		(4.8)	(7.6)			脚 5/6		2号壙C	2号墳同様		裏返出口裏側	
18	34	42	直底器	有蓋高脚 壺		(5.4)	(7.8)			脚 1/4		2号壙C	2号墳頭セクション			
19	34	42	直底器	高耳 (脚)	6.9	9.5				注溝充形 脚部1/2弱		2号壙C	2号墳同様		6号墳石室正面 あたり	
20	34	42	土師器	壺 (口縁)	(19.1)	(3.4)			1/6			2号壙C	2号墳同様 (北西 隅)			
21	34	42	土師器	壺	(12.2)	(4.4)			1/6			2号壙C	2号・6号墳同様	派土内	北西部	
22	34	42	直底器	环面	(11.0)	(4.4)			1/6		火葬部 1/4	2号壙C	2号墳北内 (東壁 裏側)			
23	34	42	直底器	环身	(10.7)	(4.0)			1/6			2号壙C	2号墳頂丘	東アゼ内		
24	34	42	土師器	壺	(12.0)	(5.0)			1/6			2号壙C	2号墳北丘頭 (南 側)			
25	34	42	土師器	壺	(11.9)	(5.4)			1/6			2号壙C	2号墳頂丘 (北東)			
26	34	42	土師器	壺	(13.40	(11.0)			1/6			2号壙C	2号墳頂丘頭 (南 側)			
27	35	43	直底器	环面	14.3	5.0			完形			2号壙C	6号墳石室		土器6 (取9上) (7‰)	
28	35	43	直底器	环面	14.3	5.0			注溝充形			2号壙C	6号墳石室		土器6 (取9上) (7‰)	
29	35	43	直底器	环面	14.4	4.8			注溝充形			2号壙C	6号墳石室		土器6 (取9上) (7‰)	
30	35	43	直底器	环面	14.8	4.8			完形			2号壙C	6号墳石室		土器6 (取9上) (7‰)	
31	35	43	直底器	环身	12.5	5.0			完形			2号壙C	6号墳石室		土器6 (取9上) (7‰)	
32	35	43	直底器	环身	12.3	4.15			注溝充形			2号壙C	6号墳石室		土器6 (取9上) (7‰)	
33	35	43	直底器	环身	12.7	4.3			注溝充形			2号壙C	6号墳石室		土器6 (取9上) (7‰)	
34	35	43	直底器	环身	12.7	4.6			注溝充形			2号壙C	6号墳石室		土器6 (取9上) (7‰)	
35	35	43	直底器	蓋	9.5	12.7		14.1	注溝充形			2号壙C	6号墳石室		土器6 (取9上) (7‰)	
36	35	43	土師器	小型壺	8.4	9.4		10.2		体部1/4 少X		2号壙C	6号墳石室		土器6 (取9上) (7‰)	
37	35	43	土師器	壺	(16.90	(12.7)			1/3			2号壙C	6号墳頂丘基底部	西側塀方	土器6中箇内	
38	35	43	土師器	壺	(19.7)	30.6		28.0	1/3		1/2弱 4/5	2号壙C	6号墳頂丘基底部	西側塀方	土器6中箇内	
39	36	44	直底器	环面	12.1	4.8			完形			2号壙C	5号墳石室		土器7 (取9上) (7‰)	
40	36	44	直底器	环身	16.4	5.3			注溝充形			2号壙C	5号墳石室		土器7 (取9上) (7‰)	
41	36	44	直底器	环面	13.7	4.5			完形			2号壙C	5号墳石室		土器7 (取9上) (7‰)	
42	36	44	直底器	环身	11.6	5.2			注溝充形			2号壙C	5号墳石室		土器7 (取9上) (7‰)	

表3 遺物観察表2

報告番号	国版番号	平真国版番号	種別	器種	法量 (cm)				残存状況			出土場所	出土遺構	層位	備考	
					口径	脚高	底径	側径	G縫	底	他					
43	36	44	須恵器	有蓋盒(筒)	8.9	4.7			(底)完形			2号墳C	5号墳石室		土器5(底なし 17‰)	
44	36	44	須恵器	有蓋盒(筒)	(7.1)	7.9	7.4		完形			2号墳C	5号墳石室		土器6(底なし 17‰)	
45	36	44	須恵器	甕	18.5	35.8			31.2	(底)完形		2号墳C	5号墳石室		土器7(底なし 17‰)	
46	37	45	須恵器	印G (追加)		13.8	6.0			完形		2号墳C	石棺墓XXII	回復土		
47	37	45	須恵器	甕	(9.1)	13.0			23.6			2号墳C	5号墳西側分室			
48	37	45	須恵器	印B	(15.4)	3.6	(11.2)		1/2 縫	1/2		2号墳C	2号墳-3号墳間		2号墳側かごの 40cm	
49	37	45	須恵器	甕(追加)		14.40	(11.30)			1/8		2号墳C			表探	
50	37	45	須恵器	白付長縄 甕	7.3	(15.3)			8.8	完形	体部1/2 地		3号墳床面			確認調査町出土
51	41	須恵器	瓶身									2号墳C	2号墳前部		写真のみ	
52	42	土師器	蓋									2号墳C	2号墳花瓶(蓋 裏側)		写真のみ	
53	42	須恵器	甕									2号墳C	2号墳前室(北側)		写真のみ	
54	44	須恵器	瓶									2号墳C	2号墳西石室門		写真のみ	
55	44	須恵器	瓶坪(脚)									2号墳C	2号墳北周護内		写真のみ	
56	44	須恵器	蓋									2号墳C	5号墳北周護内	赤褐色漆 縁土中	写真のみ	
57	44	土師器	所?									2号墳C	2号墳頂丘土 3号墳周辺		写真のみ	
58	44	須恵器	甕									2号墳C	2号墳北周護近		写真のみ	
59	45	須恵器	蓋B									2号墳C	2号墳南周護(北西 部)	黒土面直 下へ延	写真のみ	
60	45	青磁	甕									2号墳C	5号墳北半	黒土面時 鉢土中	写真のみ	
金属製品			種別	器種	法量 (mm)				残存状況			出土 場所	出土遺構	層位	備考	
報告番号	国版番号	写真国版番号			器高	長さ	幅	厚み	重量 (g)							
61	23	41	鉄製品	鍔 or 刃	30.2	31	5.5	12.0		無欠損		2号墳C	2号墳石室	黒石下		
62	26	44	鉄製品	刀子	35.8	14.5	4.6	7.1		ながご欠損		2号墳C	5号墳石室	黒土中		
63	27	45	鉄製品	鍔	28.6	24.6	1.2	3.0		完形(観水透室)		2号墳C	5号墳上			
64	27	45	鉄製品	鍔	22.8	23.7	1.1	2.5		完形(観水透室)		2号墳C	5号墳上			
65		45	鉄製品	鍔	(21.4)	23.1	1.0	1.0		部欠損 (観水透室)		2号墳C	5号墳上		写真のみ	
66		45	鉄製品	鍔	71.0	107.5	41.0	425.3		完形		2号墳C	2号墳南壁		写真のみ	
玉			種別	器種	法量 (mm)				残存状況			出土 場所	出土遺構	層位	備考	
報告番号	国版番号	写真国版番号			口径	厚さ	孔径	重量 (g)								
21	36	44	L型	白玉	5.4	4.9	2.2	0.17		完形		2号墳C	5号墳石室	深埋土 下半		
22	36	44	L型	白玉	5.2	3.4	2.2	0.13		完形		2号墳C	5号墳石室	深埋土 下半		
23	36	44	L型	白玉	4.9	3.9	2.2	0.12		完形		2号墳C	5号墳石室	深埋土 下半		
24	36	44	L型	白玉	4.9	3.0	2.2	0.10		完形		2号墳C	5号墳石室	深埋土 下半		
25	36	44	L型	白玉	5.4	3.0	2.2	0.11		完形		2号墳C	5号墳石室	深埋土 下半		
26	36	44	L型	白玉	5.4	3.7	2.2	0.11		完形		2号墳C	5号墳石室	深埋土 下半		
27	36	44	L型	白玉	5.4	3.9	2.2	0.12		完形		2号墳C	5号墳石室	深埋土 下半		
28	36	44	L型	白玉	5.3	2.8	2.1	0.09		完形		2号墳C	3号墳石室	深埋土 下半		
29	36	44	L型	白玉	5.7	2.4	2.3	0.07		完形		2号墳C	3号墳石室	土器40cm		
30	36	44	L型	白玉	5.1	3.9	2.3	0.11		完形		2号墳C	5号墳石室	深埋土 下半		
31	36	44	L型	白玉	5.2	3.2	2.3	0.11		完形		2号墳C	5号墳石室	深埋土 下半		
32	36	44	L型	白玉	5.1	2.8	2.3	0.13		完形		2号墳C	5号墳石室	深埋土 下半		
33	36	44	L型	白玉	5.4	2.8	2.3	0.12		完形		2号墳C	5号墳石室	深埋土 下半		
34	36	44	L型	白玉	5.3	3.4	2.3	0.11		完形		2号墳C	5号墳石室	深埋土 下半		
35	36	44	L型	白玉	5.3	3.3	2.3	0.11		完形		2号墳C	5号墳石室	深埋土 下半		
36	36	44	L型	白玉	5.3	3.3	2.3	0.11		完形		2号墳C	5号墳石室	深埋土 下半		
37	36	44	L型	白玉	5.4	3.9	2.2	0.12		完形		2号墳C	5号墳石室	深埋土 下半		
38	36	44	L型	白玉	5.3	2.8	2.1	0.09		完形		2号墳C	3号墳石室	深埋土 下半		
39	36	44	L型	白玉	5.7	2.4	2.3	0.07		完形		2号墳C	3号墳石室	土器40cm		
40	36	44	L型	白玉	5.1	3.9	2.3	0.11		完形		2号墳C	5号墳石室	深埋土 下半		
41	36	44	L型	白玉	5.2	3.2	2.3	0.11		完形		2号墳C	5号墳石室	深埋土 下半		
42	36	44	L型	白玉	5.1	2.8	2.3	0.13		完形		2号墳C	5号墳石室	深埋土 下半		
43	36	44	L型	白玉	5.4	2.8	2.3	0.12		完形		2号墳C	5号墳石室	深埋土 下半		
44	36	44	L型	白玉	5.3	3.4	2.3	0.10		完形		2号墳C	5号墳石室	深埋土 下半		
45	36	44	L型	白玉	5.3	3.3	2.3	0.11		完形		2号墳C	5号墳石室	深埋土 下半		

## 第4節 山田大山古墳群における放射性炭素年代 (AMS測定)

(株) 加速器分析研究所

### 1 測定対象試料

山田大山古墳群は、兵庫県丹波市春日町山田に所在する。測定対象試料は、2号墳と5号墳の石室から出土した炭化物3点である(表4)。

### 2 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸 (AAA : Acid Alkali Acid) 処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常  $1\text{mol/l}$  (1M) の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、 $0.001\text{M}$ から $1\text{M}$ まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が $1\text{M}$ に達した時には「AAA」、 $1\text{M}$ 未満の場合は「AaA」と表4に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素( $\text{CO}_2$ )を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。
- (6) グラファイトを内径 $1\text{mm}$ のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

### 3 測定方法

加速器をベースとした $^{14}\text{C}$ -AMS専用装置(NEC社製)を使用し、 $^{14}\text{C}$ の計数、 $^{14}\text{C}$ 濃度( $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ )、 $^{14}\text{C}$ 濃度( $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ )の測定を行う。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOx II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

### 4 算出方法

- (1)  $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の $^{13}\text{C}$ 濃度( $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ )を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(%)で表した値である(表4)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と記す。
- (2)  $^{14}\text{C}$ 年代(Libby Age: yrBP)は、過去の大気中 $^{14}\text{C}$ 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach 1977)。 $^{14}\text{C}$ 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表4に、補正していない値を参考値として表5に示した。 $^{14}\text{C}$ 年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、 $^{14}\text{C}$ 年代の誤差( $\pm 1\sigma$ )は、試料の $^{14}\text{C}$ 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- (3) pMC(percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の $^{14}\text{C}$ 濃度の割合である。pMCが小さい( $^{14}\text{C}$ が少ない)ほど古い年代を示し、pMCが100以上( $^{14}\text{C}$ の量が標準現代炭素と同等以上)の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表4に、補正していない値を参考値として表5に示した。

(4) 历年較正年代とは、年代が既知の試料の  $^{14}\text{C}$  濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の  $^{14}\text{C}$  濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。历年較正年代は、 $^{14}\text{C}$  年代に対応する較正曲線上の历年年代範囲であり、1 標準偏差 ( $1\sigma = 68.2\%$ ) あるいは 2 標準偏差 ( $2\sigma = 95.4\%$ ) で表示される。グラフの縦軸が  $^{14}\text{C}$  年代、横軸が历年較正年代を表す。历年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{14}\text{C}$  補正を行い、下1桁を丸めない  $^{14}\text{C}$  年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、历年較正年代の計算に、IntCal13 データベース (Reimer et al. 2013) を用い、0xCalv4.2 較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。历年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表 5 に示した。历年較正年代は、 $^{14}\text{C}$  年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

表 4 放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{14}\text{C}$  補正值)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{14}\text{C}$ 補正あり		
					$\delta^{14}\text{C}$ (‰) (AMS)	Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-160434	5	2 号墳 石室 層位：敷石の下の土	炭化物	AAA	$-28.82 \pm 0.37$	$1,610 \pm 20$	$81.83 \pm 0.23$
IAAA-160435	6	5 号墳 石室 層位：2 の下	炭化物	AAA	$-25.24 \pm 0.33$	$1,620 \pm 20$	$81.76 \pm 0.23$
IAAA-160436	7	5 号墳 石室 層位：6 の下	炭化物	AAA	$-25.98 \pm 0.31$	$1,670 \pm 20$	$81.24 \pm 0.23$

[#8071]

表 5 放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{14}\text{C}$  未補正值、历年較正用  $^{14}\text{C}$  年代、較正年代)

測定番号	$\delta^{14}\text{C}$ 補正なし		历年較正用 (yrBP)	1 $\sigma$ 历年年代範囲	2 $\sigma$ 历年年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-160434	$1,670 \pm 20$	$81.19 \pm 0.22$	$1,610 \pm 22$	404calAD–431calAD(31.7%) 492calAD–530calAD(36.5%)	396calAD–475calAD(53.0%) 485calAD–536calAD(42.4%)
IAAA-160435	$1,620 \pm 20$	$81.72 \pm 0.22$	$1,617 \pm 22$	398calAD–430calAD(43.8%) 493calAD–511calAD(15.5%) 518calAD–529calAD( 8.9%)	389calAD–475calAD(60.3%) 485calAD–535calAD(35.1%)
IAAA-160436	$1,690 \pm 20$	$81.07 \pm 0.22$	$1,669 \pm 22$	348calAD–369calAD(24.9%) 378calAD–406calAD(43.3%)	333calAD–421calAD(95.4%)

[参考値]

## 5 測定結果

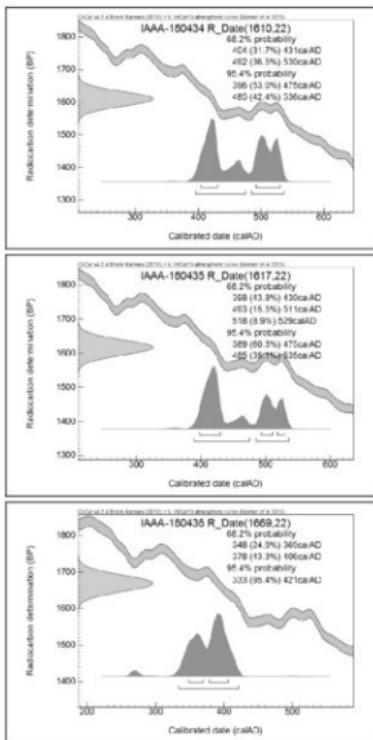
測定結果を表4、5に示す。

試料の<sup>14</sup>C年代は、5が1610±20yrBP、6が1620±20yrBP、7が1670±20yrBPである。曆年校正年代(1σ)は、5が404~530cal AD、6が398~529cal AD、7が348~406cal ADの間に各々複数の範囲で示される。

試料の炭素含有率はいずれも60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

## 文献

- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360  
 Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0–50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 55(4), 1869–1887  
 Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of <sup>14</sup>C data, *Radiocarbon* 19(3), 355–363



第2図【図版】曆年校正年代グラフ（参考）

## 第5章　まとめ

山田大山古墳群では今回3基の横穴式石室を本発掘調査した。それらの特徴について、簡単にまとめてみたい。

3基の築造順序は、出土している須恵器の型式からみて、5号墳→6号墳→2号墳の順である。ただ、第4章でも述べたように、5号墳の築造時期であるが、出土している环身环蓋2組のうち、一組はTK 47型式の特徴を持ち、もう一組はMT 15型式の特徴を持っている。また、有蓋高坏については口縁端部が丸みを帯びているので、若干新しい要素は感じられるが、短脚である点からMT 15型式の範疇でとらえている。この型式差を初葬・追葬とみるか、同時に副葬されたと考えるかで築造時期は変わってくる。

遺構の項でも述べたが、5号墳は前壁を内側に積み足している。この積み足しが初葬までに行われたのか、あるいは追葬時に行われたのかについては、石室を現状保存したため、詳細については確認できない。石室側壁を全面的に積み足して規模を減じるという例は神宮谷3号墳（京都府綾部市）などでも認められるが、当墳の場合、当初の壁面と積み足した部分が密着していることと遺物の出土状態からは追葬の有無が確認できなかった。したがって、須恵器群については同時に副葬されたと考え、築造時期を6世紀前葉としたい。つまり、導入期の横穴式石室の新例と考えられる。

兵庫丹波でこれまでに見つかっている導入期の横穴式石室には多利向山C 2号墳と井原至山古墳があり、それらの石室は平面形が方形を呈するものである。また、京都丹波にはこれらより若干先行する可能性がある北ノ庄13号墳・14号墳（亀岡市）で同様の石室が検出されている。兵庫丹波でも旧多紀郡の灰高1号墳では平面形が長方形を呈し、短辺に溝道が付く両袖式の横穴式石室が導入されている。播磨地方では板石を用いた片袖式の横穴式石室である剣坂古墳が導入期のものだが、こちらも長方形の石室の短辺に溝道が設けられる。また、但馬においては竪穴系横口式石室で八幡山5号墳が同じ時期の石室に当たる。つまり、いわゆる「T」字形の平面形を持つ5号墳と同様のものは近隣では認められない。ただ、平面形だけの類似をたどればTK 47型式併行のものとされる新立表2号墳（福岡県福岡市）や岩橋千塚（和歌山県和歌山市）などが挙げられるが、現在のところ、それらとの関連については不明とせざるを得ない。ただ、石室構築時の用石法に一貫性がない、前壁の積み足し、といった特異な点があることから、技術系譜・伝播の面でも意義深いものと考える。

2号墳については、6号墳を破壊して構築しているという点を除けば、7世紀代の無袖化した横穴式石室として典型的なものと考えられる。

6号墳の築造時期は奥壁前に副葬されていた須恵器からすれば6世紀後葉以前ということになる。ただ、これらの須恵器が初葬時のものかどうかについては、検討が必要である。遺構の項でも述べたように、2・6号墳の墳丘や周溝からは6世紀半ばに遡る須恵器が出ており、これらを6号墳の初葬時のものと考えることもできる。6号墳の石室は無袖式ではあるが、基底石に板状石材を立てている点、奥壁石材の一部が側壁にかませている点で石室の構築方法としては古い要素が残っていることも、築造時期を遡らせる要素となると考えている。また、東側壁が基底石のみであるため、本来の石室の用石法は明瞭ではないが、使用石材や用石法に一貫性がない点で5号墳と共通しているのではないかと考えられ、この点からも5号墳に引き続いで築造されたのではないかと考えられる。

山田大山古墳群は本発掘調査した3基以外にも、確認調査された3号墳や、ほとんどが事業範囲外に当

たり、墳丘・石室がほぼ残っており、巨石で石室を構築する1号墳、同じく巨石で石室を構築していると思われる4号墳などがあり、一つの古墳群中に様々なバリエーションの横穴式石室が存在している。このバリエーションが単に時期差によるものなのか、2号墳が6号墳を破壊して構築されていることを重視して、そこに造営集団の差を見出すのかについては、現状では判断できないものの、当古墳群の調査結果が丹波地方や県下の横穴式石室の導入を考える上で意義深いものであることは確かである。

古墳時代以外では、調査区内から出土した律令期の土器と、中世前期の土器が注目される。

須恵器坏B（48）は8世紀代と考えられ、同様の時期の遺物は谷内においても採取されている。須恵器坏B（48）は2号墳石室追葬時の遺物が示す時期とは100年近く離れており、下流の扇状地において集落が形成された時点で、再び上流にある古墳群への干渉を始めたものと考えられる。

同様のことは中世前期においてもみられる。5号墳の墳丘上から龍泉窯割花文青磁碗片（60）が出土しており、鎌倉時代に墳丘上が使用されている。下流の谷入口付近の扇状地では同時代の瓦器片や須恵器片が多数採集されており、宝鏡印塔も存在する。このことから谷入口周辺には鎌倉時代の集落が存在した可能性が高く、奈良時代から時間を経て、再び上流にある古墳群への干渉を始めたものと考えられる。古墳を靈的な聖地（勝地）としてとらえ、中世墓あるいは経塚を構築する例は多い、今回の調査においても5号墳周辺から中世火葬墓の存在を示唆する集石遺構S X 02・S X 08・S X 09や丹波焼甕（47）が見つかっており、5号墳の周辺を墓地としていた可能性が考えられる。その場合、S X 07が火葬場として機能していた可能性を考えたいが、類例が乏しく検討課題としたい。

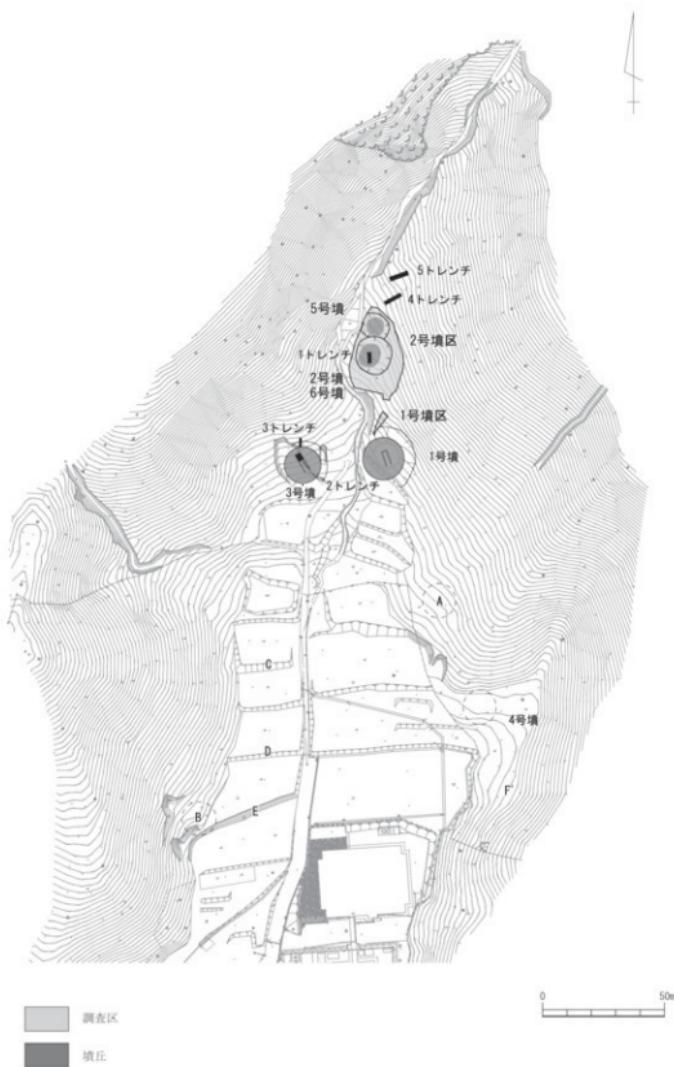
本古墳群では更に新しい時期の焼土坑群が見つかっている。焼土坑群の周辺からは寛永通宝M3・M4・M5が見つかっており、近世にも古墳群への干渉があったことが分かる。

また、今回出土した鉄製の猿（M6）は類例がないが、庚申信仰に伴うものとも考えられる。本古墳群の3号墳の近接地には若宮神社の跡地もあり、この谷奥が信仰の場であったことは想像に難くない。

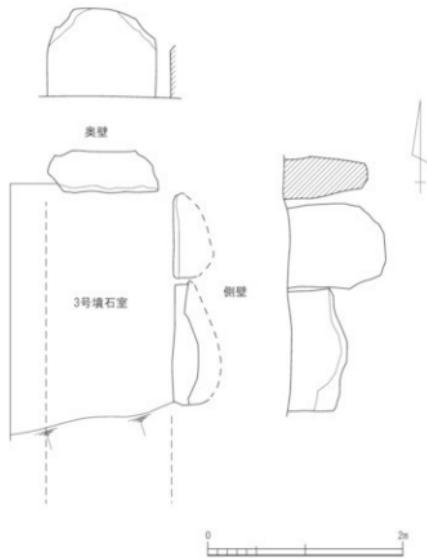
#### （参考文献）

- 大野嶽夫「岩橋千塚と周辺のT字形横穴式石室（上・下）」『古代学研究』第109号・第110号（1985・1986）  
加西市史編さん委員会『加西市史 第七巻 史料編1 考古』（2010）  
佐藤隆「6世紀における須恵器大型化の諸様相—陶邑編年の再構築に向けて・その3ー」『大阪歴史博物館研究紀要』第6号（2007）  
中浜久喜「播磨における横穴式石室の構造と変遷」『横穴式石室から見た播磨』第2回播磨考古学研究集会実行委員会（2002）  
中村弘「但馬における横穴系埋葬施設の導入」『古代但馬と日本海』但馬考古学研究会（1995）  
西口圭介「近畿の中世墓」『日本の中世墓』高志書院（2009）  
林日佐子「丹後・丹波における初現期の横穴式石室」『考古学と技術』（1988）  
兵庫県教育委員会『多利向山古墳群』（1986）  
兵庫県教育委員会『三駄迦山北麓遺跡群』（2013）  
福岡市教育委員会『席田遺跡群（VI）』（1990）  
松井忠春・小池寛「改築された横穴式石室—京都府中丹地域例を中心にー」『京都府埋蔵文化財情報』第62号（1996）  
宮川慎一・矢野健一「兵庫県加西市剣坂古墳調査報告」『辰馬考古資料館 考古学研究紀要』3（1999）  
横穴式石室研究会『研究集会 近畿の横穴式石室』横穴式石室研究会事務局（2007）

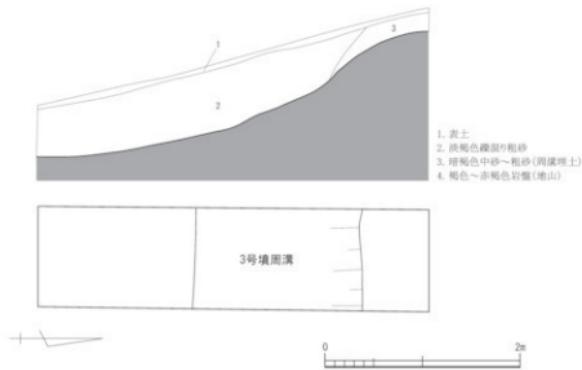
# 図 版



調査区とその周辺

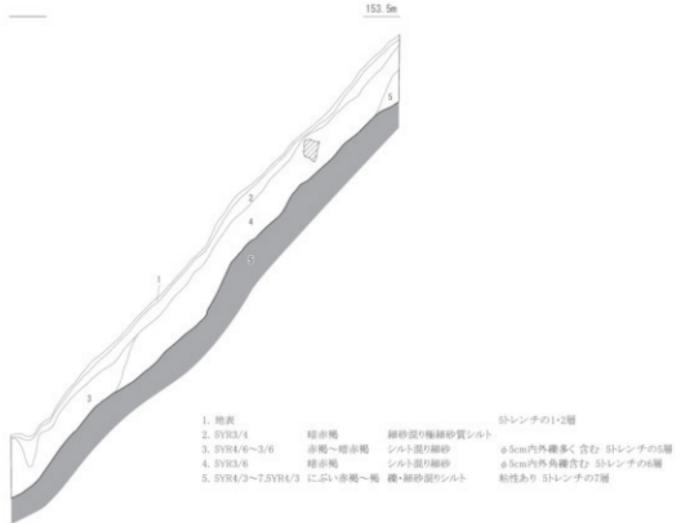


2トレンチ 平面図・断面図

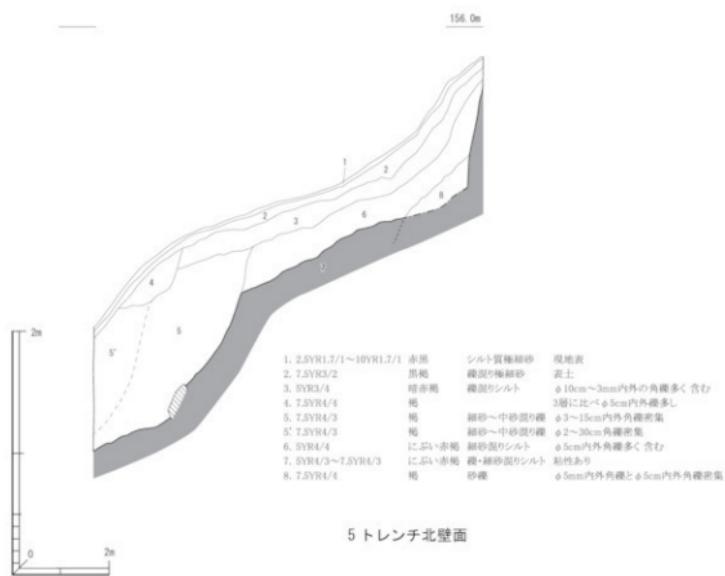


3トレンチ 平面図・断面図

3号墳確認調査

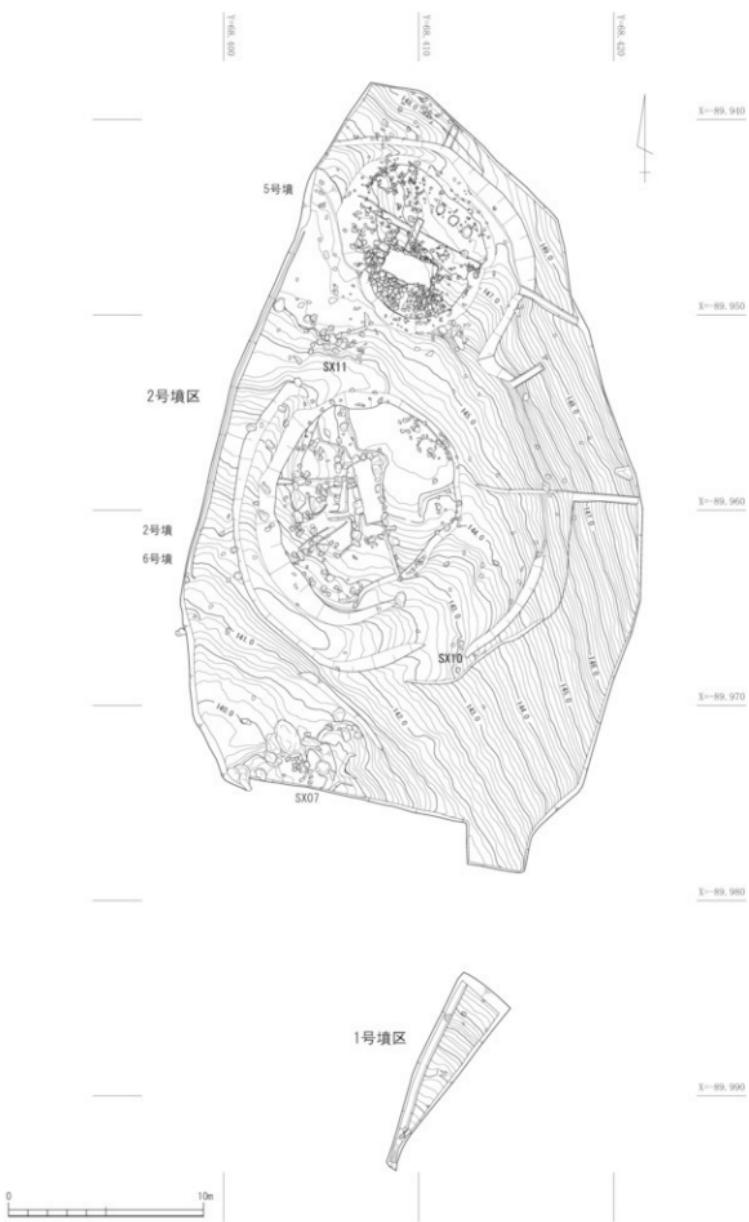


4 レンチ北壁面

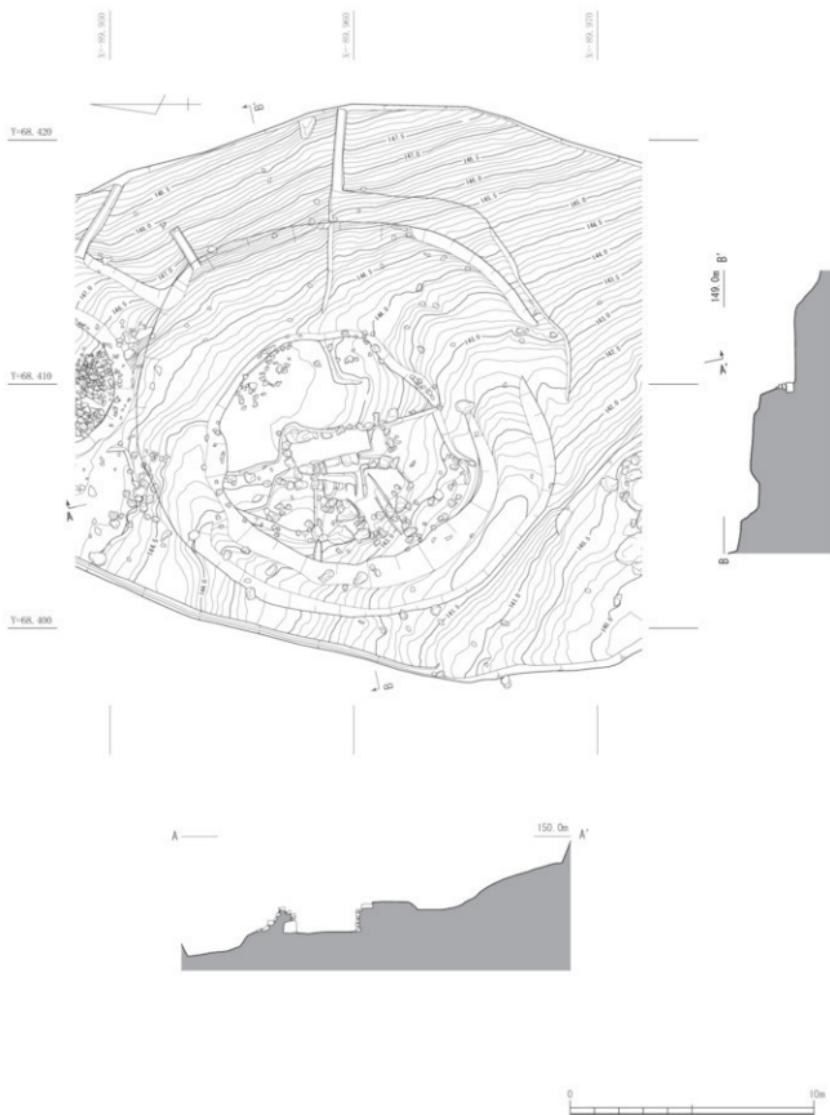


5 レンチ北壁面

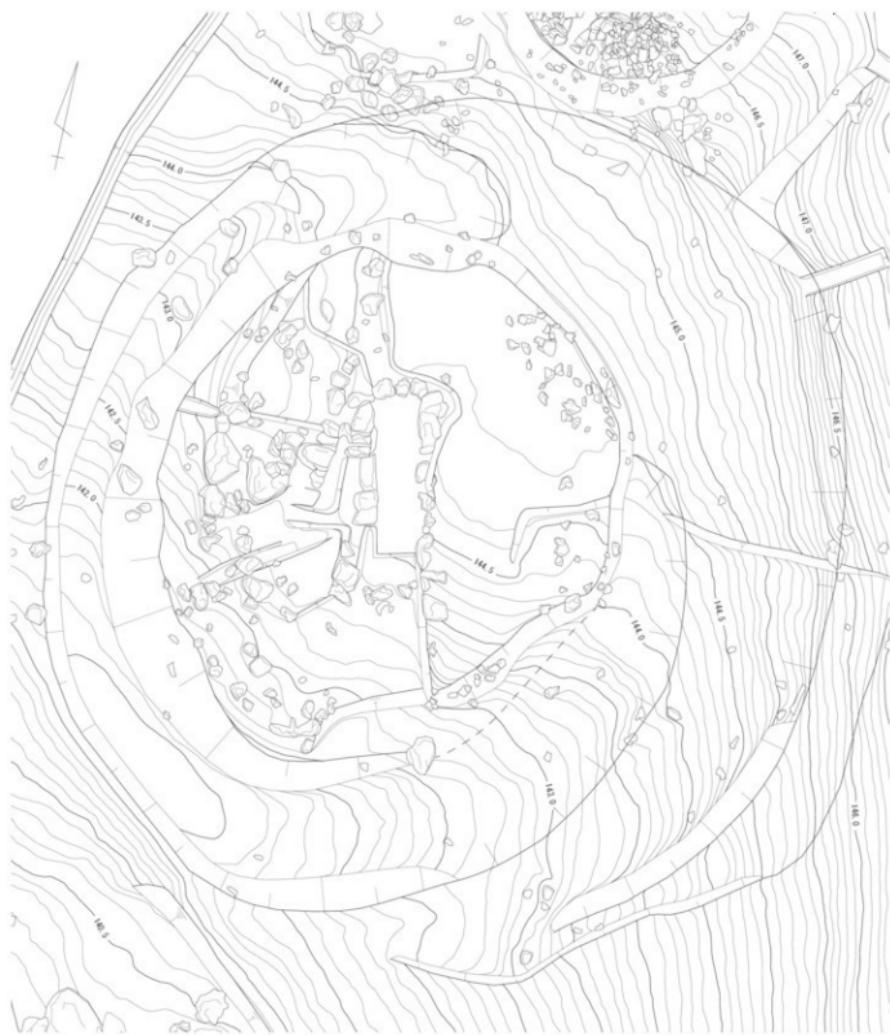
図版 4



調査区全体図

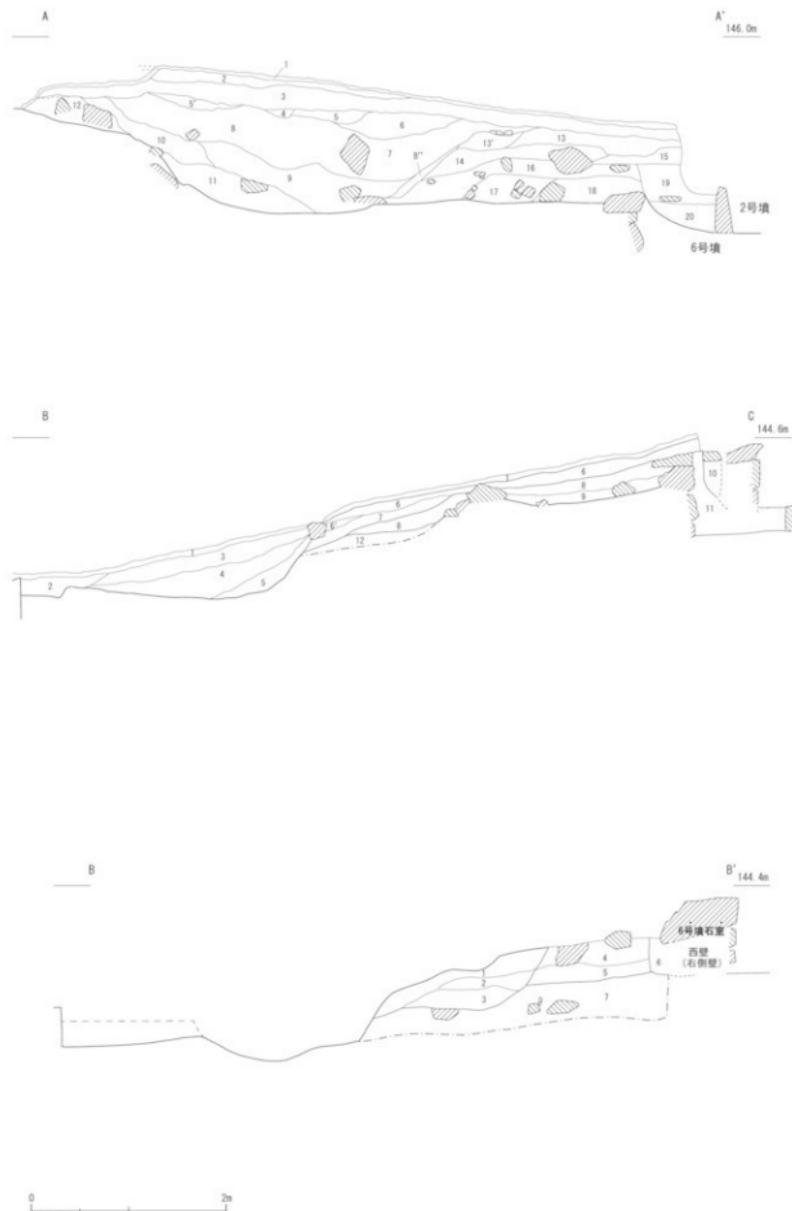


2号墳・6号墳全体図



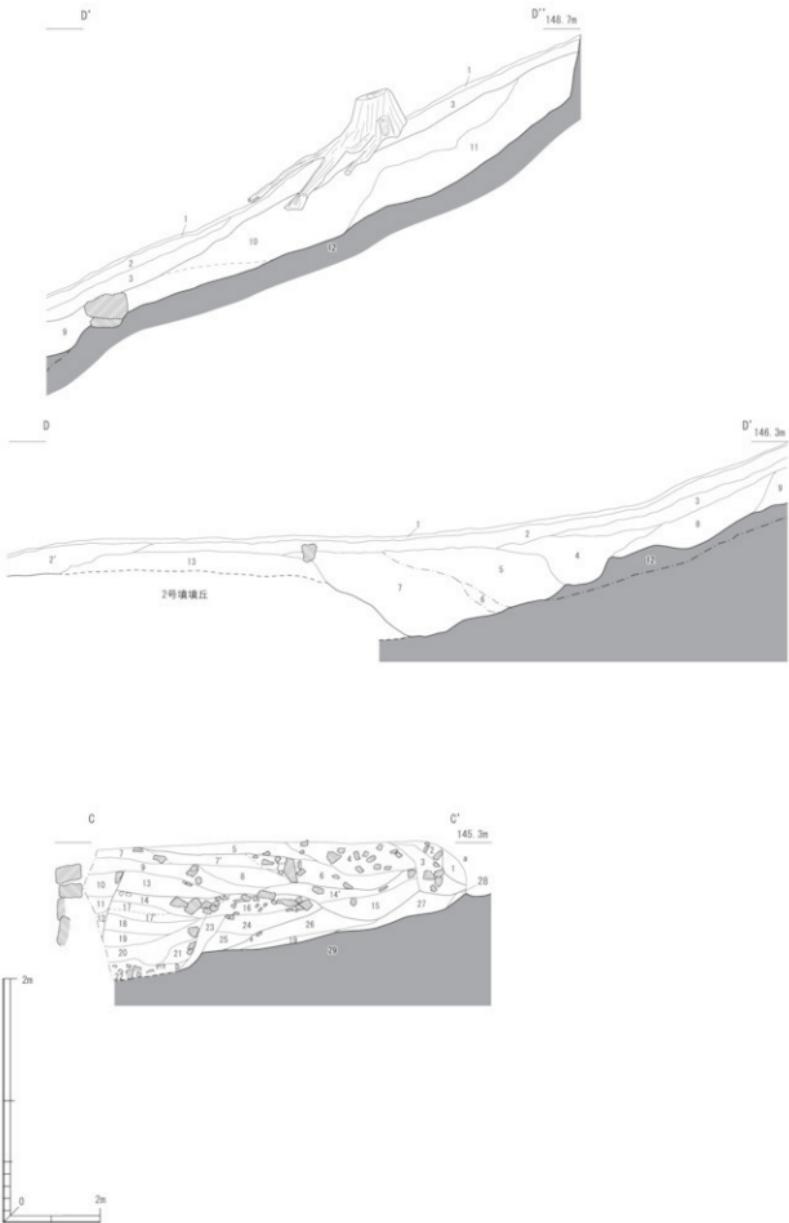
0 5m

2号墳全体図

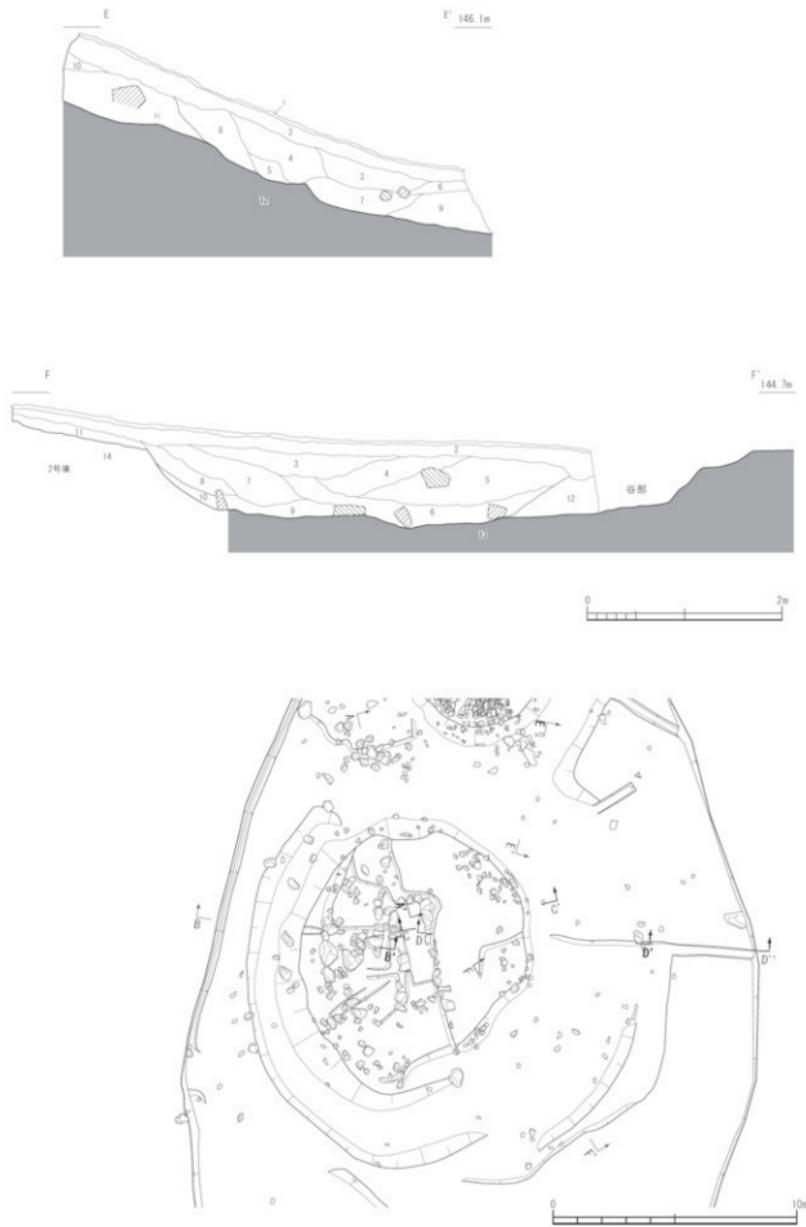


2号填・6号填 墓丘・周溝土層断面図 1

図版 8



2号墳・6号墳 填丘・周溝土層断面図 2



2号墳・6号墳 墳丘・周溝土層断面図3

## A-A'

1.			
2. 7.SYR4/4	褐	礫混じり細砂	
3. 7.SYR4/3	褐	シルト含む細砂	黄土。在土中に入る
4. 7.SYR4/3~7.SYR4/4	褐	細砂混じりシルト	径5cm内外角縫多く含む 5号埴生土手1層に同じ
5. 7.SYR3/3	暗褐	堆積物質細砂	5mm~5cm角縫多く含む 5号埴生土手0層に対応
6. SYR3/4	暗赤褐	礫混じり極細砂	
7. 7.SYR4/3	褐	混じり細砂	炭化物含む 径2cm内外角縫入る "S"はマンガンが集積する
8. 7.SYR3/3	暗褐	シルト混じり細砂へ中砂	径1cm内外角縫多く含む 10cm大縫入る やや黄色調
9. 7.SYR3/4	暗褐	混じり細砂	径5cm~10cm角縫・径5mm~1cm角縫多く含む
10. SYR3/3	暗赤褐	礫混じりシルト質極細砂	径5mm~1cm角縫多く入る
11. 7.SYR3/3	暗褐	混じり細砂質シルト	径5cm~10cm角縫多く含む
12. 7.SYR3/3	暗褐	シルト混じり細砂	
13. 7.SYR3/4	暗褐	シルト混じり極細砂質細砂	径10cm内外角縫含む 2号埴生土盛土
13'. 7.SYR3/4	暗褐	粗砂混じりシルト	径5cm内外角縫少く 塵土・埴生土少く
14. 7.SYR4/4~7.SYR4/4	褐~暗褐	粗砂混じりシルト	粒子粗く、締まり乏しい 径5cm内外角縫多し
15. 7.SYR3/4	暗褐	混じり細砂	径1cm内外角縫多く含む 5cm~10cm大縫入る
16. SYR3/4	暗赤褐	混じり質細砂	2号埴生土盛土
17. 7.SYR4/3	褐	堆積物質細砂	2号埴生土
18. 7.SYR4/3	褐	細砂シルト	6号埴生丘
19. 7.SYR3/4	暗褐	細砂質シルト	角縫を含まない 6号埴生丘
20. SYR3/4	暗褐	細砂質シルトへ粗砂	19層よりも濃い・色調
21.		細砂質シルトへ粗砂	6号埴生丘

## B-C

1. 7.SYR5/3	にふい赤褐	細砂一躍	
2. 7.SYR4/4	褐	粗砂混じり細砂	旧泥炭の角縫
3. SYR3/4	暗赤褐	礫混じり細砂	2号埴生丘底土
4. SYR4/4	にふい赤褐	混じり細砂質シルト	2号埴生丘底土
5. SYR3/4~SYR3/2	暗赤褐	混じりシルト質細砂	5cm~8cm内外角縫多く含む 径5cm内外角縫含む 2号埴生堆土(埴生土第1層)
6. SYR4/4	にふい赤褐	シルト混じり細砂	2号埴生丘底土 色土の影響を受ける
6'. SYR4/4	にふい赤褐	混じり細砂	2号埴生丘底土
7. SYR3/3	にふい赤褐	堆積物質混じり細砂	径3cm~5cm内外角縫多く含む 2号埴生丘底土
8. SYR3/4	暗赤褐	混じり細砂	6号埴生丘底土
8'/ SYR3/4	暗赤褐	シルト混じり細砂	6号埴生丘底土(1次埴丘)
9. SYR3/6	暗赤褐	混じり細砂シルト	径5cm内外角縫入りれる 6号埴生丘底土
10. SYR3/4	暗赤褐	混じりシルト質極細砂	径5cm内外角縫入り 6号埴生底基處理土
11. SYR4/4	にふい赤褐	混じり極細砂質細砂	10層より縫少ない 6号埴生室理土
12. SYR3/6	暗赤褐	細砂混じりシルト	径5cm内外角縫入りれる 旧表土もしくは表土直下 B-B'7層対応

## B-B'

1. 7.SYR4/4	褐	粗砂・小礫混じり細砂へ極細砂	2号埴生丘底土
2. 7.SYR2/3	暗褐	細砂混じり細砂へ小礫	2号埴生丘底土(1次埴丘)
3. 7.SYR3/4	暗褐	粗砂混じり細砂へ細砂	季大角縫多く含む 2号埴生丘底土(1次埴丘)
4. 7.SYR3/4	暗褐	粗砂・小礫混じり細砂へ極細砂	6号埴生丘底土
5. 7.SYR3/3	暗赤褐	粗砂混じり細砂	6号埴生丘底土
6. 7.SYR2/3	褐	細砂混じり細砂	6号埴生底基處理土
7. 7.SYR3/4	暗褐	粗砂混じり細砂	季大・人頭大的角縫含む 旧表土もしくは表土直下 B-B'7層対応

## D-D'

1. 7.SYR3/3	暗褐	細砂・中砂混じり細砂へ極細砂	黄土
2. SYR3/6	暗赤褐	シルト質細砂混じり細砂	B-C間6層対応
2'. SYR4/3	にふい赤褐	細砂混じり粗砂	径3mm~5cm内外角縫多く含む B-C間6層対応
3. SYR4/4	にふい赤褐	混じりシルト質極細砂	黄色調
4. SYR4/3	にふい赤褐	混じりシルト混じり細砂	径2mm内外角縫多く含む
5. SYR4/4	にふい赤褐	混じりシルト混じり細砂	径2mm内外角縫多く含む 径5cm内外角縫若干入る
6. SYR3/4	暗赤褐	混じりシルト混じり細砂	径5mm内外角縫含む
7. SYR3/4	暗赤褐	混・粗砂混じり細砂	径5mm~10cm角縫多量に入る
8. SYR3/6	暗赤褐	混じり細砂	10cm縫合む
9. SYR3/6	暗赤褐	混じりシルト質細砂	10層の上部に近く、8層に比べ縫少ない 径3cm内外角縫含む
10. SYR3/4	暗赤褐	シルト含むシルト質極細砂	下部に径10cm内外の角縫多く、11層に近い
11. SYR3/3	暗赤褐	混・粗砂含むシルト質細砂	
12. SYR3/3	暗赤褐	混・粗砂混じり細砂質シルト	径10cm内外の縫入る(地山)
13. 7.SYR3/4	暗褐		炭化物入る 2号埴生丘底土 B-C間8層対応

## C-C'

1. 7.5VR3/4	昭和	繩＝シルト混じ砂	2号埴丘盛土
2. SVR3/2	昭赤鶴	シルト混じ砂	2号埴(2次)埴丘盛土
3. SVR3/4～7.5SVR3/3	にぶい赤鶴～鶴	繩＝シルト質細砂	径5cm～10cm角縫多く入る 列石底盤方墳土
4. SVR3/4	昭赤鶴	繩＝シルト混じ砂	径10cm内外の角縫を多量に入れる 2号埴(2次)埴丘盛土
5. 7.5VR3/3	昭和	シルト混じ砂	径5mm～1cm角縫多く含む 粘性・繩主には乏しい
6. SVR3/3	昭赤鶴	繩＝シルト混じ砂	
7. SVR3/6	昭赤鶴	繩＝シルト質粗砂	
7'. SVR3/4	昭赤鶴	繩＝シルト質粗砂	2号埴(1次)埴丘盛土
7'' SVR3/4	昭赤鶴	繩＝シルト質粗砂	6mm以上の粒子多く汚れる
8. SVR3/4	昭赤鶴	繩＝シルト混じ砂	径10cm内外縫多く含む
9. SVR3/4	昭赤鶴	繩＝シルト混じ砂	粘性は乏しい、若く縫まる 径3mm内外縫多く、径3cm内外縫入る 2号埴丘盛土
10. SVR3/4	昭赤鶴	繩＝シルト混じ砂	径5mm内外縫多く含む
11. SVR3/4	昭赤鶴	繩＝シルト混じ砂	粘性は乏しい、若く縫まる 径5mm内外の縫を22層以上多く含む 2号埴石底盤方墳土
12. SVR3/2	昭赤鶴	繩＝粗砂混じ砂	粘性あり、縫まりは乏しい 径5mm内外の縫を多く含む 2号埴石底盤方墳土
13. SVR3/4	昭赤鶴	シルト混じ砂	径5mm内外縫多く含む
14. SVR3/3	昭赤鶴	繩＝シルト混じ砂	径5cm～10cm角縫多く含む 径3mm内外縫多く含む 2号埴丘盛土
14'.			8mm被覆、縫まりは乏しい 6号埴周溝埋土
15. 7.5VR3/4	昭和	繩＝粘土シルト混じ砂	径3mm内外縫多く含む 6号埴周溝埋土
16. SVR3/3	昭赤鶴	シルトを含む細砂～中砂	径20cm内外縫多く含む 6号埴丘盛土
17. SVR3/2	昭赤鶴	シルト混じ砂	径5cm～10cm角縫多く含む 6号埴周溝埋土
17'.			11層の1/2 平 径3mm内外角縫多く含む
18. 2.5VR3/2	昭赤鶴	シルト混じ砂	10cm内外縫多く含む 粘性あり
19. SVR2/4	昭赤鶴	粗砂混じ砂	
20. SVR2/4	昭赤鶴	粗砂混じ砂	粘性あり、縫まりは乏しい
21. SVR3/4	昭赤鶴	繩＝シルト混じ砂	5cm～10cm角縫入る
22. SVR3/3	昭赤鶴	粗砂＝粗砂混じ砂質粘土	1径15cm内外角縫密
23. SVR3/3	昭赤鶴	粗砂＝粗砂混じ砂	粘性あり、やや縫まる 径3cm～5cm内外縫多く入る
24. SVR3/2	昭赤鶴	繩＝シルト混じ砂質粗砂	径5mm内外入る 径3cm内外角縫多く入る やや縫まる人為の盛土
25. SVR3/4	昭赤鶴	シルト混じ砂	黄色山プロックする粘性あり 縫まりに乏しい
26. SVR3/4	昭赤鶴	繩混じ砂質～シルト～粗砂	間には3～5mmの角縫が多く含まれる 谷面堆積
27. SVR3/4～SVR3/6	昭赤鶴	土質の縫	径10cm内外の角縫が密に入る
28. SVR3/3	昭赤鶴		基本9cm厚であるが、間の土柱が少ない
29. 7.5VR4/4	鶴		径10cm以上の角縫が露出する 塚山(半で粗砂混じ砂質粘土)

## E-E'

1. 7.5VR3/3	昭和	粗砂混じ砂	表土(地表)
2. SVR4/6	赤鶴	繩＝シルト混じ砂	径5～10cmの角縫多く含む(黄色調)
3. 7.5VR3/4～SVR4/4	鶴～にぶい赤鶴	繩＝粗砂混じ砂	径5mm内外の縫を多く含む 径10cm角縫含む 2号埴周溝埋土 10世紀以降の埋土
4. SVR3/4	昭赤鶴	粗砂混じ砂	径5cm角縫及び3mm角縫含む 2号埴周溝埋土 10世紀以降の埋土
5. SVR3/6	昭赤鶴	シルト混じ砂	7層に近く10cm大角縫含む 2号埴周溝埋土 10世紀以降の埋土
6. 7.5VR4/4	鶴	粗砂混じ砂	2号埴周溝埋土 10世紀以降の埋土
7. SVR3/6	昭赤鶴	繩＝粗砂混じ砂	径5cm角縫含む 2号埴周溝埋土 10世紀以降の埋土
8. SVR3/6	昭赤鶴	シルト＝粗砂混じ砂	7層に近く5cm～10cm大角縫密 2号埴周溝埋土
9. SVR3/4	昭赤鶴	粗砂混じ砂	径10cm内外角縫含む 汚れる 2号埴周溝埋土
10. SVR3/6	昭赤鶴	粗砂混じ砂	5号埴周溝埋土
11. SVR3/4	昭赤鶴	繩混じ砂	径5cm～50cm角縫含む 5号埴周溝埋土
12. SVR3/3	昭赤鶴	粗＝粗砂混じ砂	～～～～ 谷面堆積

## F-F'

1. 7.5VR3/3	昭和	繩砂～中砂混じ砂	表土(地表)
2. 7.5VR4/6	鶴	繩＝中砂混じ砂	径3mm内外縫含む
3. SVR3/4	昭赤鶴	繩＝中砂混じ砂	径5cm～10cm角縫多く含む 2号埴周溝埋土
4. 2.5VR3/4	昭赤鶴	粗砂混じ砂	径10cm内外角縫多く含む 径5cm内外角縫多く含む 2号埴周溝埋土
5. 2.5VR3/2	昭赤鶴	粗砂混じ砂	径10cm内外角縫含む 2号埴周溝埋土
6. SVR3/3	昭赤鶴	粗砂混じ砂	径20cm内外直角縫入り 2号埴周溝埋土
7. SVR3/4	昭赤鶴	粗砂混じ砂	径1cm内外角縫多く含む 2号埴周溝埋土
8. SVR2/4	昭赤鶴	粗砂混じ砂	粗砂混じ砂
9. SVR2/2	黒鶴	粗砂混じ砂	土壌化している 2号埴周溝埋土
10. 7.5VR3/3	昭和	粗砂混じ砂	土壌化している 2号埴周溝埋土
11. SVR3/4	昭赤鶴	繩＝粗砂混じ砂	2号埴周溝(2層)の影響を受ける
12. SVR3/3	昭赤鶴	繩＝シルト混じ砂	径1cm～5cmの縫多く含む 谷面堆積(周溝の側) 黄色調
13. SVR1/4	にぶい赤鶴	繩混じ砂	地山(谷部の～～)
14. SVR1/4	にぶい赤鶴	繩混じ砂	

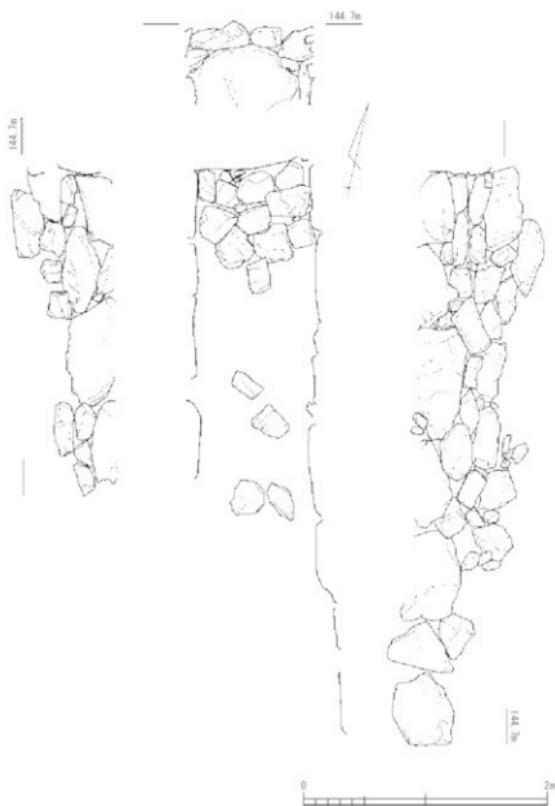
図版 12



2号墳 墓丘及び石室の状況



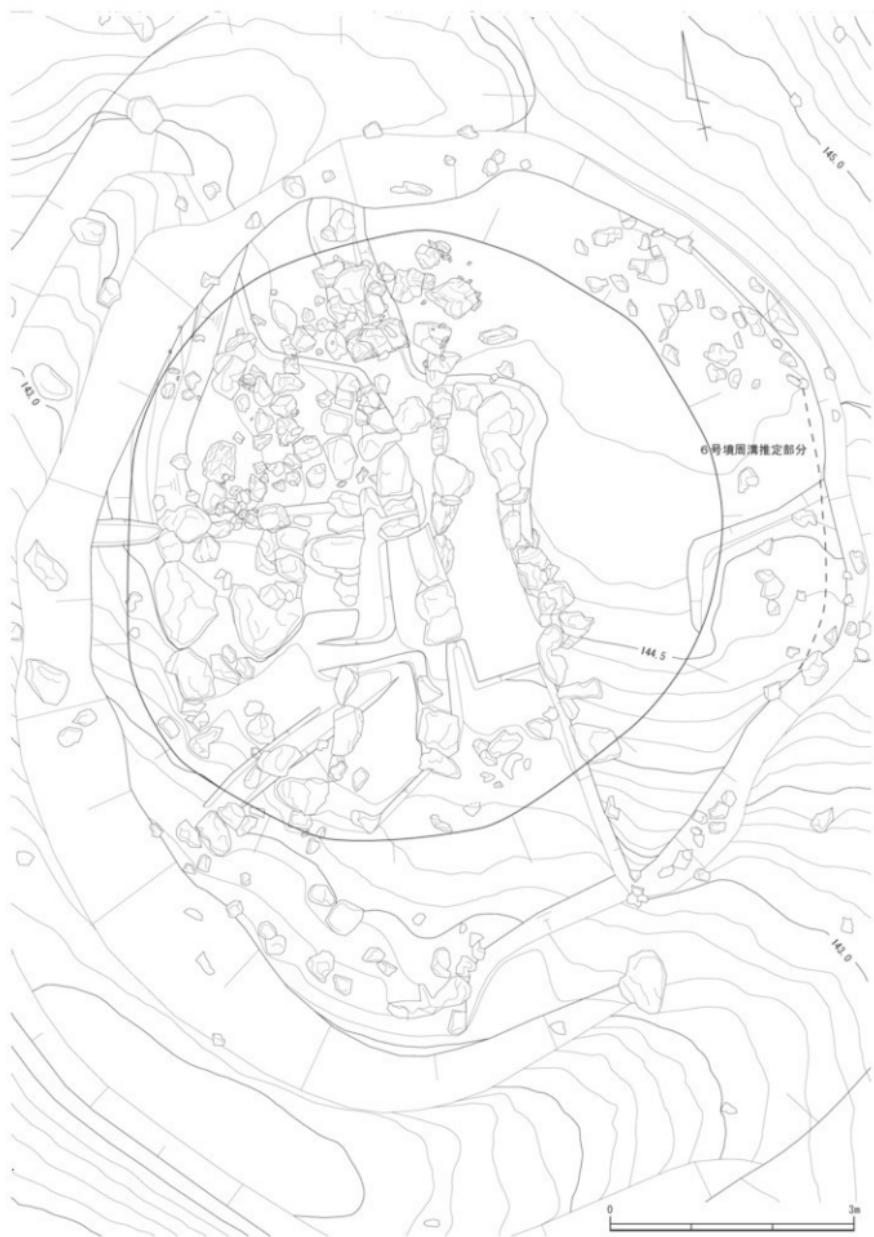
2号填石室 1



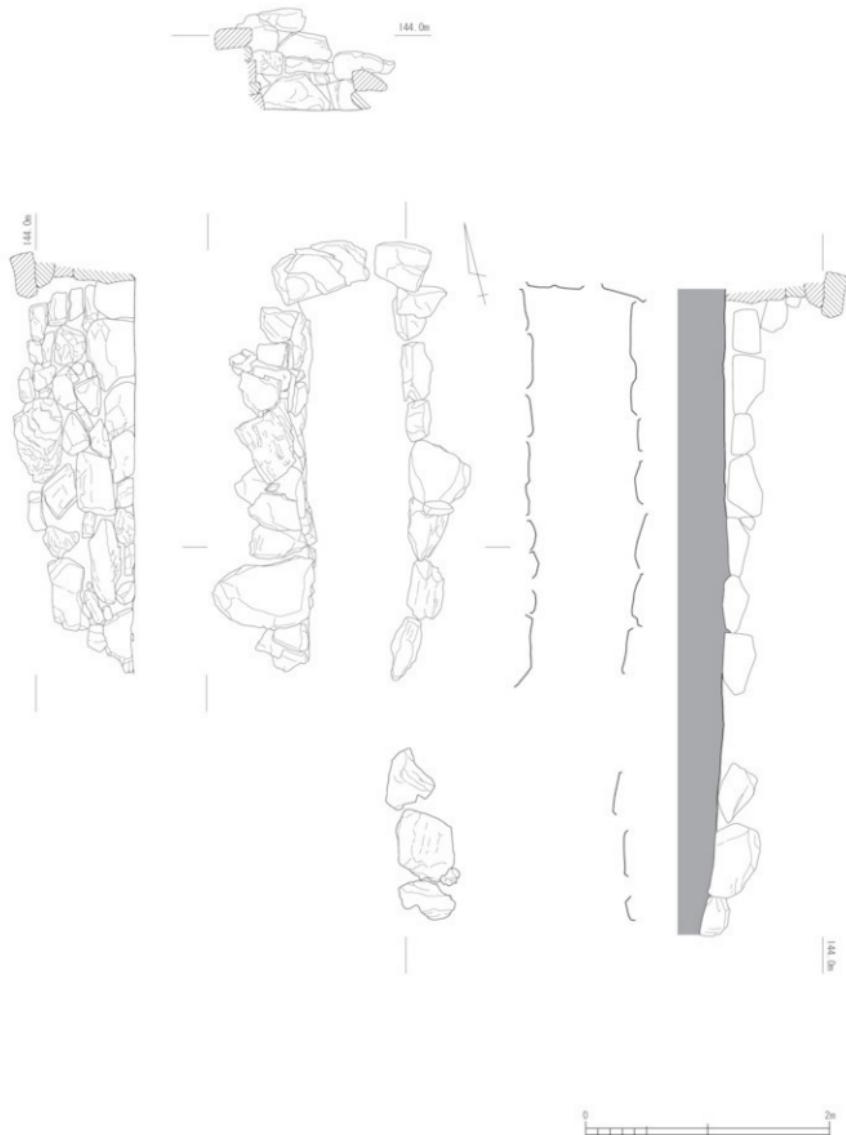
2号墳石室2



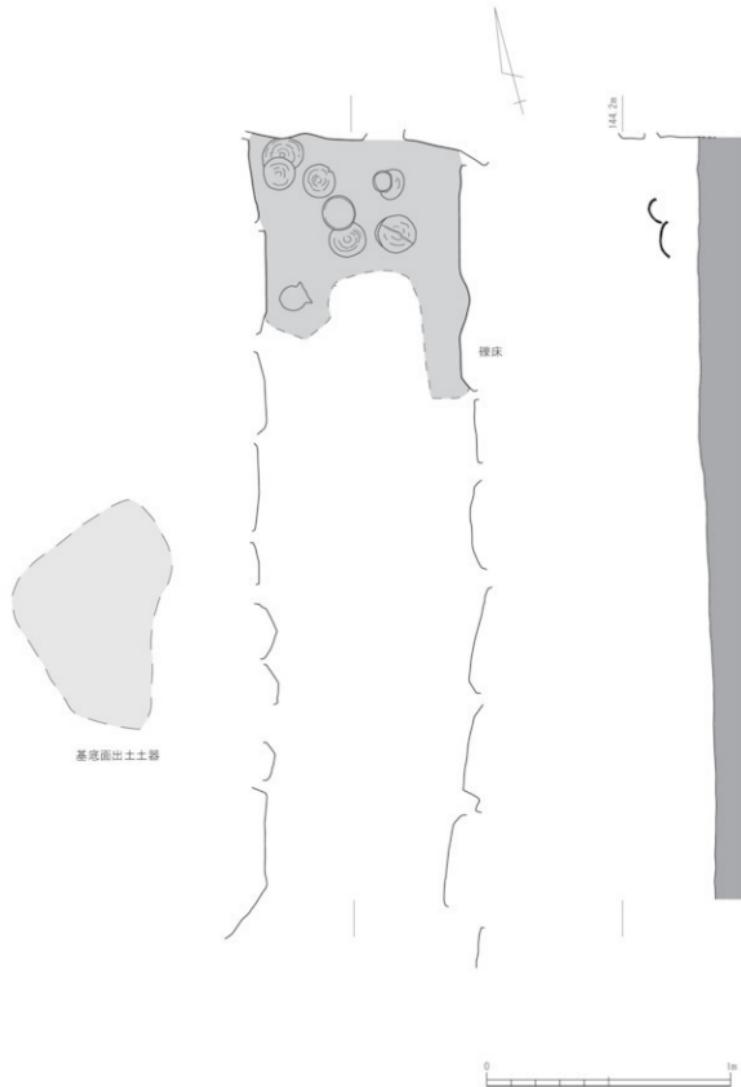
2号墳遺物出土状況図



6号墳 墳丘及び石室の状況



6号墳石室



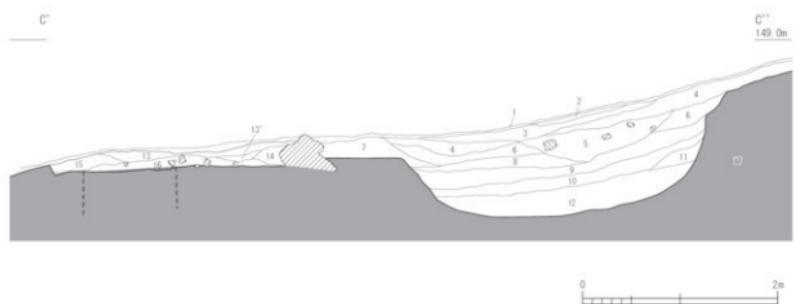
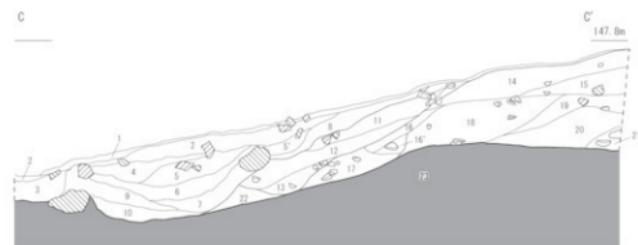
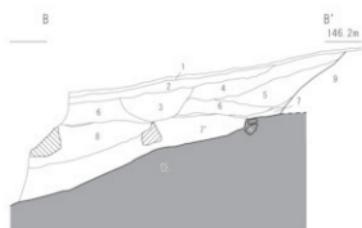
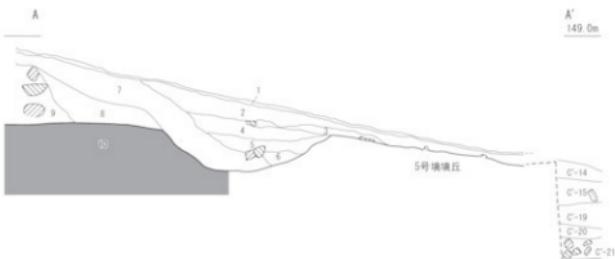
6号墳石室遺物出土状況図



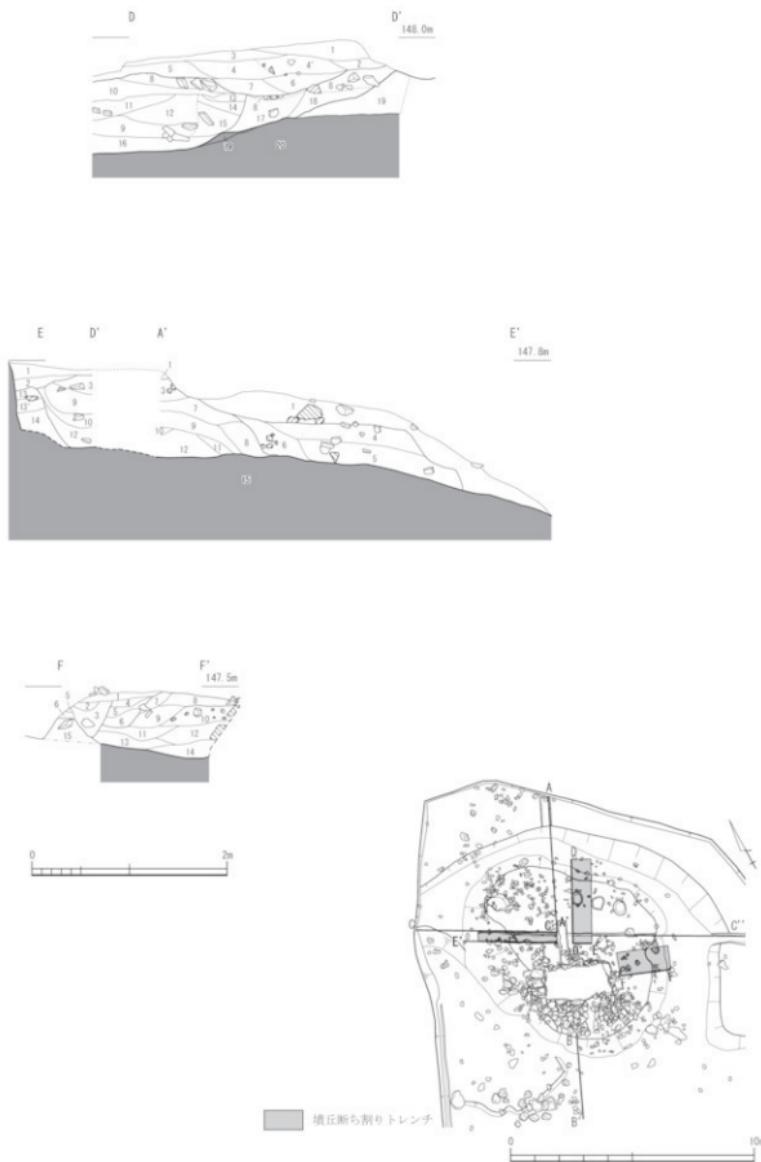
5号墳全体図



5号墳及び上層の遺構



5号墳 墳丘・周溝土層断面図 1



5号墳 墳丘・周溝土層断面図 2

## A-A'

1. 7.DVR3/3	暗褐	細砂～極細砂	表土
2. SVR3/6～7.DVR1/6	赤褐色～褐	極細砂質～フル径粗砂	径10cm内外角礫多く含む (5号埴岡調理土最上部)
3. SVR3/6	赤褐	細砂～シルト質極細砂	堅土
4. SVR3/4	暗赤褐	細砂～シルト質極細砂	堅土
5. SVR3/3	暗赤褐	細・極細混じ極細砂質シルト	径10cm内外角礫多く含む やや黄色調
6. SVR3/4	暗赤褐	細砂～シルト質極細砂	やや黄色調
7. SVR3/4	暗赤褐	細混じシルト	(5号埴岡調理土)
8. SVR4/4	にふい赤褐	細混じ(極細)砂質シルト	谷堆積
9. SVR3/4～SVR2/4	暗赤褐～極暗赤褐	細・中砂混じシルト	(ベース)
10. 7.DVR3/4	暗褐	シルト混じ細砂～中砂	径10cm内外褐が頭を出す 地山

## B-B'

L	2. 7.DVR3/4	暗褐	細混じ極細砂	地表
3. 7.DVR3/2	褐	細混じ(極細)砂質細砂	径1~3cm角礫多く含む 表土	
4. 7.DVR3/4	暗褐	細・極細混じ極細砂	径3~10cm角礫多く含む 植物根の埋乱	
5. 7.DVR3/2	暗褐	シルト混じ(極細)	土壤化している	
6. 7.DVR3/1	褐	細・シルト混じ(極細)	径10cm内外角礫含む	
7. 7.DVR3/2/1	黑	細混じシルト	マツガ集積層 所々 沈化物入る	
8. 7.DVR3/4	暗褐	細・中砂混じシルト	径3~10cm角礫含む	
K	9. 7.DVR4/3	褐	細混じ(極細)	5号埴岡土
10. 7.DVR3/4	暗褐	シルト混じ(極細)～中砂	径10cm内外褐が頭を出す 地山	

## C-C'

L	1. DVR3/2	暗赤褐	シルト混じ(極細)	地表
2. DVR4/4	にふい赤褐	細砂・シルト混じ(極細)	径10cm～20cm角礫多く含む	
3. DVR3/3～DVR4/4	にふい赤褐	細砂・シルト混じ(シルト)	径3cm～10cm内外の角礫を含む 残根の埋積	
4. DVR4/4	にふい赤褐	細・細混じシルト	径10cm内外角礫多く含む やや黄色調	
5. 7.DVR4/4	褐	細砂・シルト混じシルト	径10cm内外角礫含む	
K	6. 7.DVR4/1	褐	細混じ(極細)	やや黄色調
7. 7.DVR4/4	にふい赤褐	細砂・細混じ(極細)	径10cm内外角礫含む	
8. DVR4/4	にふい赤褐	細・細混じシルト	径5cm内外角礫含む	
9. 7.DVR4/4	褐	細砂・細混じシルト	5号埴岡2次堆積	
10. 7.DVR4/4	褐	細砂・細混じ(シルト)	径10cm内外角礫多く含む	
11.				10cm内外角礫多く含む
12. 7.DVR4/2	褐	細砂・細混じ(極細)～シルト	径5cm内外を含む 絆まきい 2次堆積	
13. DVR3/4	暗赤褐	細砂・シルト混じ(シルト)	径5cm内外角礫含む 2次堆積	
14. DVR4/4	にふい赤褐	細砂・シルト混じ(極細)～シルト	既往あり 5cm内外の角礫を主に、径20cm内外の小礫など多量の礫を含む 1次堆積	
15. DVR3/6	暗赤褐	細砂・細混じ(シルト)	径3cm～5cm角礫多く含む 1次堆積	
16. 7.DVR4/4	褐	細砂・シルト	既往あり 前述まきい 1次堆積	
17. SVR3/2	赤褐色	シルト・混じ(極細)砂質細砂	堆積物の層 肥料化する	
18. DVR4/4	にふい赤褐	細砂・細混じ(シルト)	既往あり 前述まきい 1次堆積	
19. 7.DVR4/4～DVR4/8	褐～にふい赤褐	細砂・細混じ(シルト)質粘土	地山土のロッカ含む 1次堆積	
20. DVR4/4	にふい赤褐	細砂・細混じ(シルト)	径3cm～5cm角礫多く含む 1次堆積	
21. DVR4/4～DVR4/8	赤褐	細砂・細混じ(シルト)～粘土	7.DVR4/4～8.DVR4/8の間(シルトブロック)を含む	
22. DVR4/4	にふい赤褐	半砂質シルト～粘土	径10cm～20cm角礫多量を含む	
23. 7.DVR3/4	暗褐	細・細混じ(シルト)～粘土	泥流堆積	

## C'-C''

1. SVR3/2	暗赤褐	シルト混じ(極細)	地表
2. SVR4/3	にふい赤褐	シルト・細砂混じ(極細)	8題の母子相続
3. SVR4/4～7.DVR1/4	にふい赤褐～褐	細砂・シルト	径1mm内外粒状出 黃色調
4. SVR4/4	赤褐	細砂・シルト	8題の母子相続
5. SVR3/6	暗赤褐	細砂・シルト	既往あり
6. SVR3/6	暗赤褐	細・細混じ(中砂混じ)シルト	径5cm～10cm角礫多し
7. 7.DVR4/4	褐	細砂・シルト	堆積土
8. SVR3/6	暗赤褐	細・細混じ(中砂混じ)シルト	径5cm～10cm角礫多し
9. SVR3/4～SVR3/6	暗赤褐	シルト・細砂混じ(極細)	8題の母子相続
10. SVR3/4	暗赤褐	細混じ(極細)砂質細砂	径5cm内外角礫多く含む 土壌化 11題に近い
11. SVR4/4	にふい赤褐	シルト質細砂	径5cm内外角礫多
12. SVR3/4	暗赤褐	細混じ(極細)砂質シルト	径5cm内外角礫多く含む 10題と同質
13. 7.DVR4/4	褐	シルト混じ(極細)	径3cm内外角礫混入
14. SVR4/4	にふい赤褐	細砂・シルト質細砂	径5cm内外角礫多
15. SVR4/4	にふい赤褐	シルト混じ(極細)砂質細砂	径1~2cm角礫多く含む
16. SVR4/4～7.DVR4/4	にふい赤褐～褐	細混じ(極細)砂質シルト	径5cm内外角礫多く含む
17. DVR4/4	にふい赤褐	細・細砂含じシルト～粘土	下平より径20cm内外褐頭出 黃色調 周廣原

## D-D'

1. 7.SVR0/6	褐	細砂質にシルト	径2~5cm以下の角礫を含む
2. 7.SVR0/4	褐	細砂質にシルト	含まれる
3. 7.SVR0/4	褐	粗め混じり細砂質シルト	径3cm以下の礫含む
4. 7.SVR0/4	褐	シルト質細砂	やや混濁
5. 7.SVR0/4	褐	シルト混じり細砂～細砂	径10cm以下の角礫含む
6. 7.SVR0/4	褐	細砂混じり細砂	径5cm~10cm角礫を含む
7. 7.SVR0/3~7.SVR0/4	褐	シルト質細砂質シルト	径3cm以下の礫多く含む
8. SVR0/4	暗赤褐	細砂質シルト	径5cm以下の角礫多く含む
9. 7.SVR0/4~7.SVR0/4	褐	細砂混じりシルト	径20mFL (10m~20m)の角礫を多く含む
10. SVR0/4	暗赤褐	細砂質シルト	径2m以下の角礫含む 土質は柱状である
11. SVR0/4	にじみの褐	シルト質細砂	径3cm~5cm角礫を含む
12. 7.SVR0/4	褐	細砂混じり細砂質シルト	径5cm以下の礫多く含む物化を含み汚れる
13. 7.SVR0/3	褐	細砂質シルト	径3m以下の角礫含む
14. 7.SVR0/3	褐	細砂質シルト	径3m以下の角礫含む
15. SVR0/4	暗赤褐	シルト混じり細砂	径5cm以下の礫含む~2mFL (1m)の角礫含む
16. SVR0/4	暗赤褐	シルト混じり細砂	径10cm~20cmの礫を含む
17. 7.SVR0/4	褐	シルト混じり細砂	径3cm~5cm角礫を含む
18. 7.SVR0/3	褐	細砂を多く含むシルト	径5m以下の角礫を含む
19. 7.SVR0/3~7.SVR0/4	褐	シルト混じり礫	径1m以下の礫多く含む 芽殖地
20. 7.SVR0/4	暗赤	シルト混じり細砂~中砂	径10cm以外隕が頭を出す 基盤

## E-E'

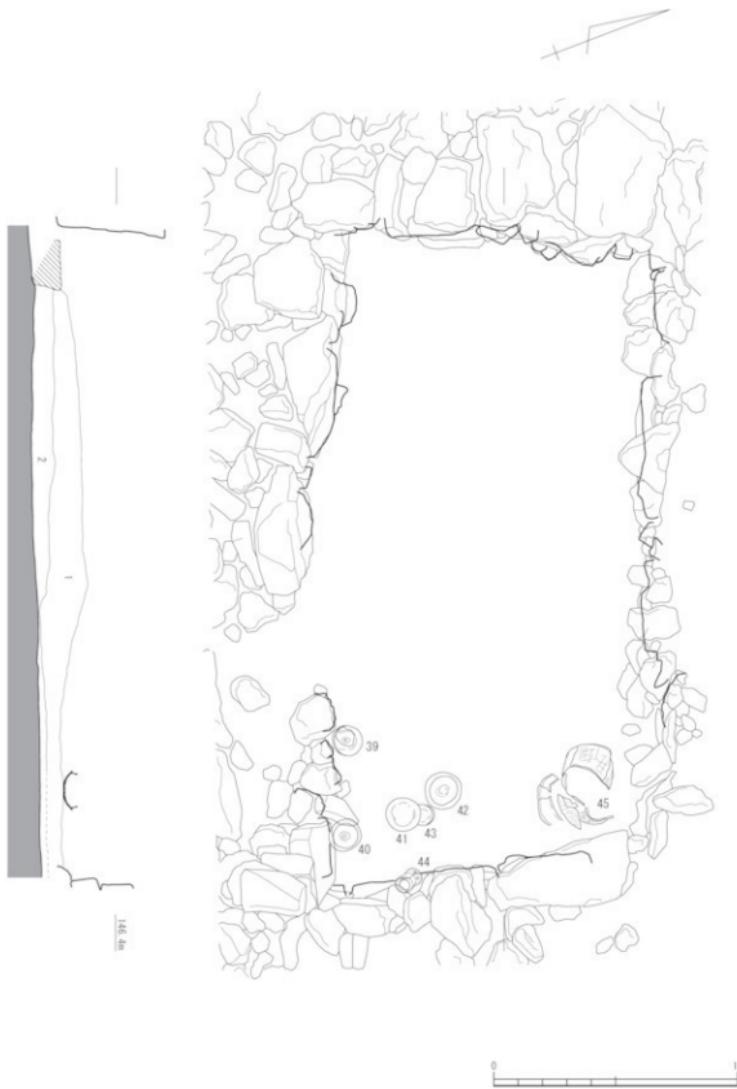
1. SVR0/4	にじみの褐	鐵・細砂混じる細砂質シルト	鉄分あり 径20cm内外の凹溝を交叉し 径5cm内外の角礫を多く含む D-D'の5層対応
2. SVR0/4	暗赤褐	細砂質シルト	径5cm以下10cm~20cmの礫を含む 土壌化し汚れる
3. SVR0/4	暗赤褐	細砂質シルト	径2m以下の角礫含む 土質は柱状である D-D'の10層
4. SVR0/4	にじみの褐	シルト質細砂	径3cm~5cm角礫を含む D-D'の11層
5. SVR0/4	にじみの褐	細砂混じるシルト質粘土	径5cm以下の礫含む 径10cm~11cmの角礫を密に含む
6. SVR0/4	暗赤褐	シルト混じる細砂	径2m~3mの角礫及び10cm以上の角礫密集
7. SVR0/4	暗赤褐	鐵・細砂混じるシルト	粘性あり 徒歩5m内の角礫を含む
8. 7.SVR0/4	褐	鐵・細砂混じるシルト質シルト	径1cm以下の角礫を含む
9. SVR0/4	にじみの褐へ暗	細砂混じるシルト質粘土	径5m内外の角礫多く含む
10. SVR0/4	にじみの褐	細砂混じるシルト~粘土	7.SVR0/4の標高の山頂シルトブロック間に含む 径2m~3m角礫を含む
11. SVR0/4	暗赤褐	シルト混じる細砂	径5m~20mの角礫を含む 粘性あり 全体に網状に欠ける
12. SVR0/6	赤褐	鐵・細砂混じる粘土質シルト	径10cm~20cmの角礫を多量に含む
13. SVR0/4	暗赤褐	シルト混じる細砂	径3m以下の礫を含む
14. 7.SVR0/4	褐	シルト混じる細砂	径3cm~5cm角礫を多量に含む
15. 7.SVR0/4	褐	鐵・細砂~中砂混じるシルト~粘土	~

## F-F'

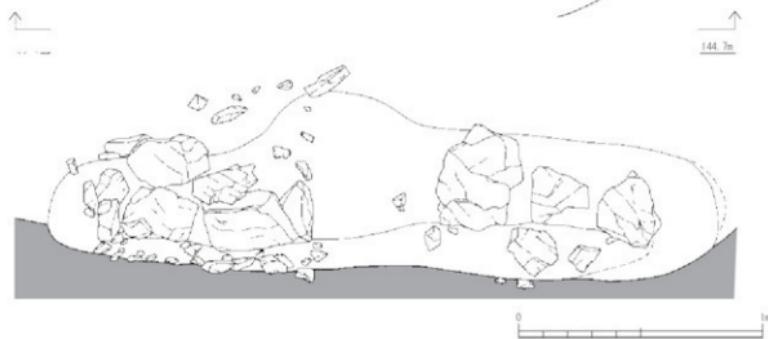
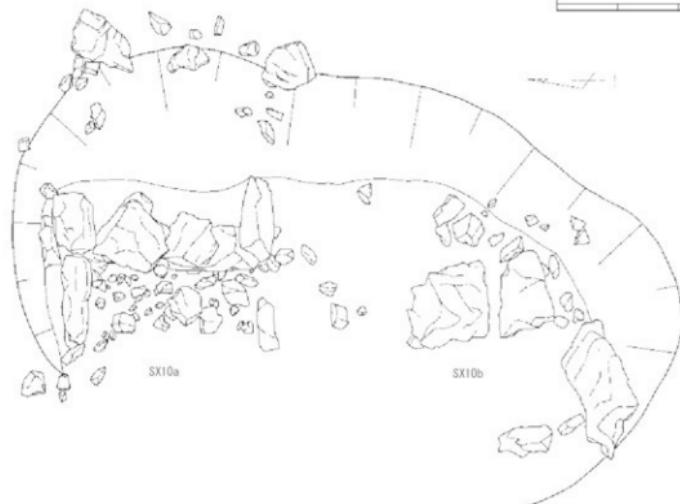
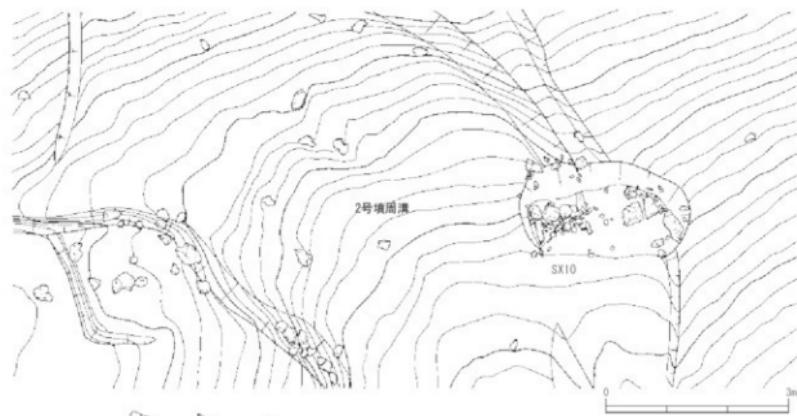
1. SVR0/6	暗赤褐	細砂混じるシルト質細砂	径1cm内外の角礫多く含む
2. SVR0/4	褐色土塊	細砂混じるシルト質細砂	径5m内外の角礫含む~2mFL (1m)の礫含む 大量の礫の埋土
3. SVR0/4	暗赤褐	細砂質シルト	崩落多く含む 大量の礫の埋土
4. SVR0/4	暗赤褐	鐵・細砂混じるシルト	粘性あり 徒歩2m内外の角礫多く含む 1次堆疊
5. SVR0/6	暗赤褐	鐵・細砂混じる細砂	径3m内外の角礫多く含む 2次堆疊
6. SVR0/4	にじみの褐	細砂混じるシルト	径1cm~5cm内外の角礫を含む 2次堆疊
7. SVR0/6	暗赤褐	細砂混じるシルト	径3m内外の角礫多く含む
8. SVR0/6	赤褐	シルト混じる細砂	径5m内外の角礫を含む 破壊走る 1次堆疊
9. SVR0/6	暗赤褐	シルト混じる細砂	径5m内外の角礫を含む 破壊走る 1次堆疊
10. SVR0/4~7.SVR0/6	にじみの褐へ暗赤褐	シルト混じる細砂質細砂	径10cm~15cmの外縁多く含む 1次堆疊
11. SVR0/4	にじみの褐	細砂混じるシルト	径2m内外の角礫多く含む 破壊走る 1次堆疊
12. SVR0/6	暗赤褐	細砂混じるシルト	径5m内外の角礫多く含む やや破壊走る 1次堆疊
13. SVR0/4	暗赤褐	鐵・細砂混じるシルト	径5m内外の角礫入る 汚れる 1次堆疊
14. SVR0/6	暗赤褐	細砂混じる細砂質シルト	径5cm~15cm内外の角礫を多く含む 黄色調 1次堆疊
15. SVR0/6	暗赤褐へにじみの赤褐	シルト~粘土	地山
16. SVR0/6	暗赤褐へにじみの赤褐	細砂へ中砂含む鐵混じるシルト~粘土	地山



5号墳石室 平面図・立面図



5号墳石室遺物出土状況図

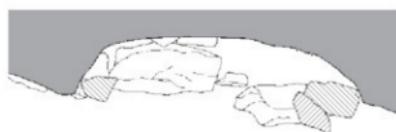


石榴墓 SX10

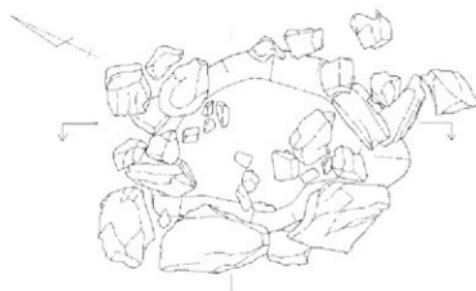


不明石組遺構 SX11

SX08



144.7m



144.7m

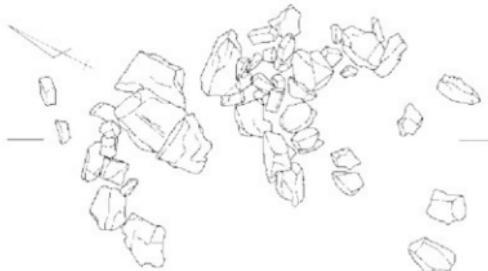


144.7m



1. STB4/4 植生  
細砂混じり細砂  
φ10cm内外角錐多く含む  
2. STB3/6 植生  
細砂混じりシルト質極細砂  
φ1~2cm石粒(礫)多く含む  
3. STB3/6 植生  
中砂・細砂混じシルト質極細砂  
粘性あり

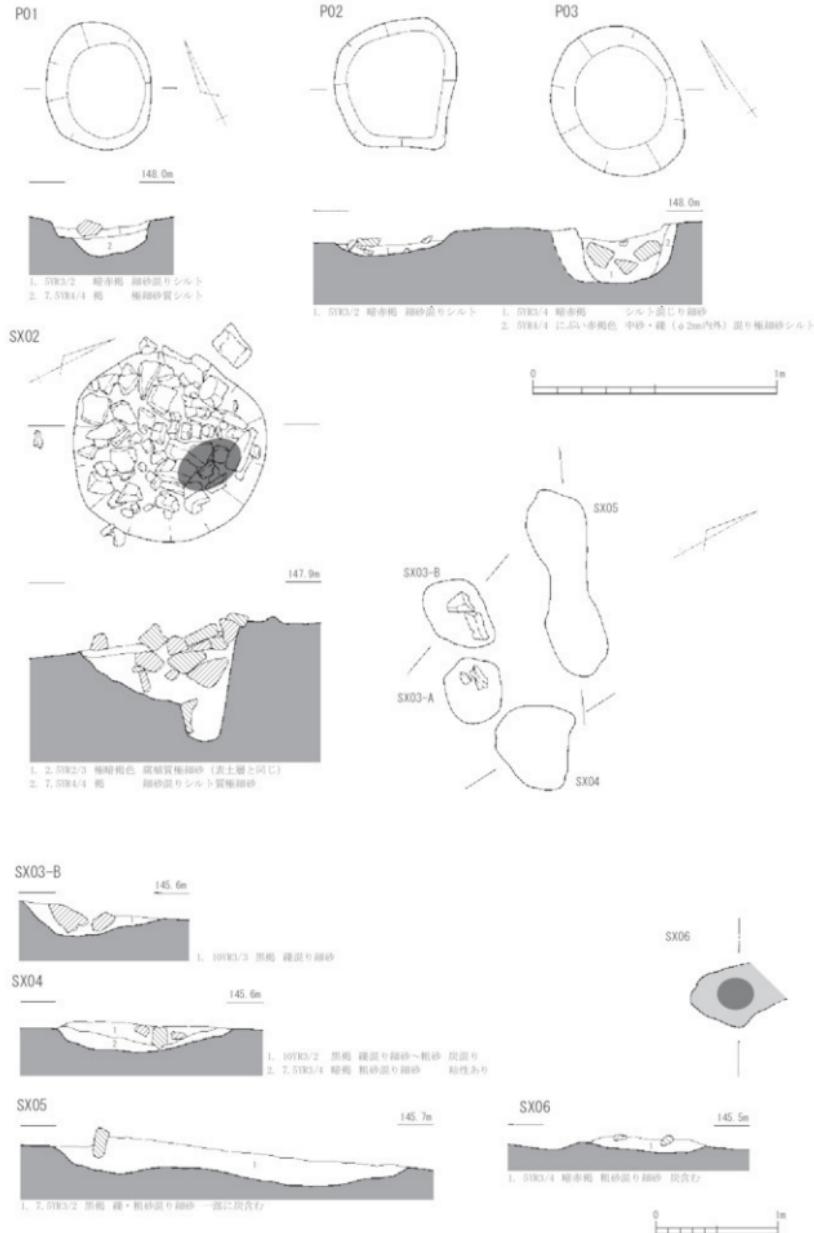
SX09



147.3m



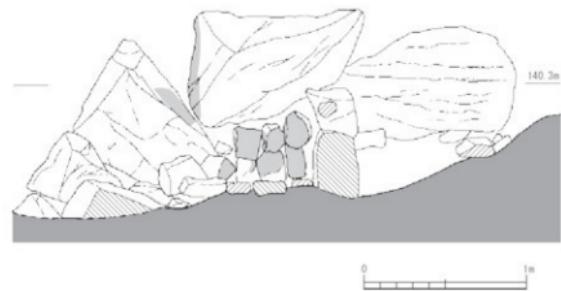
図版 30



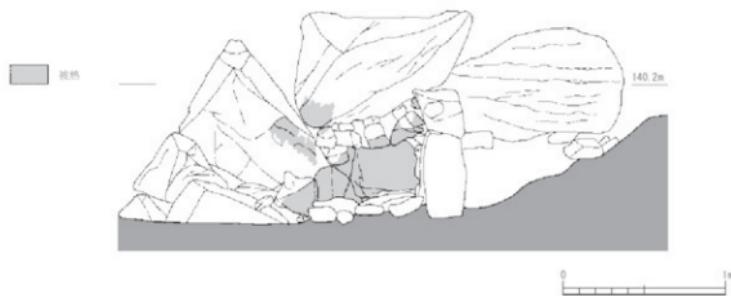
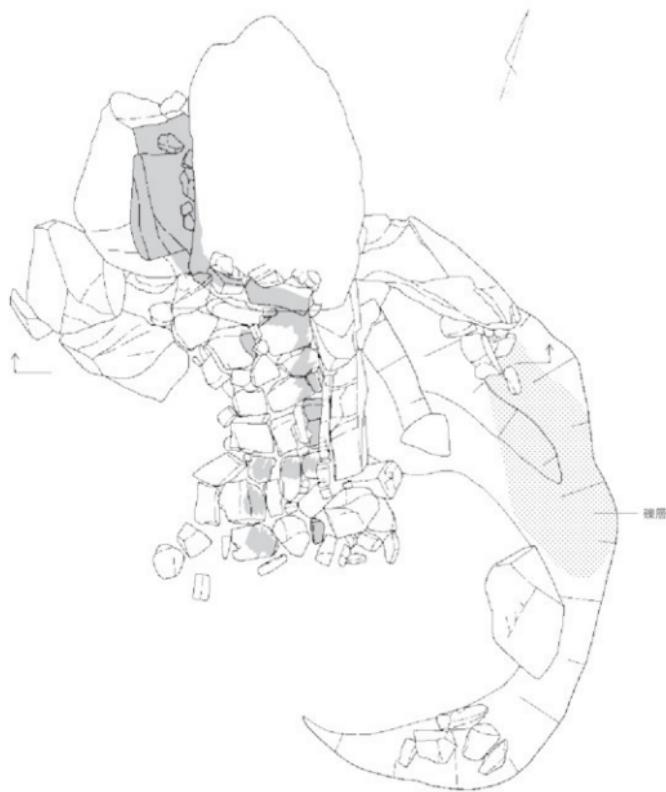
ピット群・中世墓状集石遺構 SX02・焼土抗群



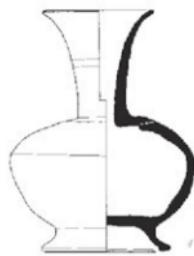
1. 7.0m/1 縦横割りシート  
2. 2mmの格子状多孔セメント



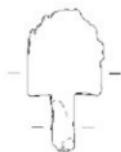
火葬址遺構 SX07 上層



火葬址遺構 SX07 下層



0 20cm



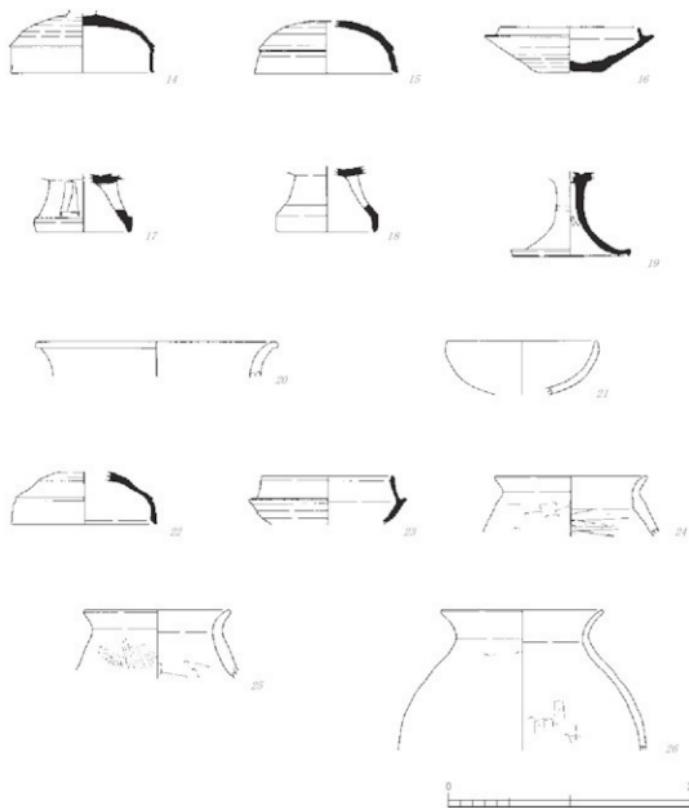
0 5cm  
M.I.

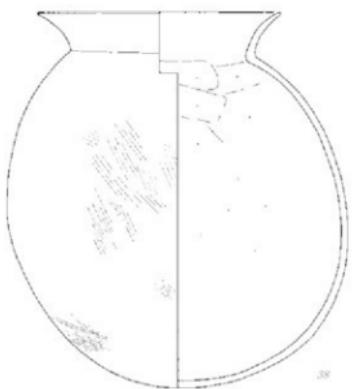
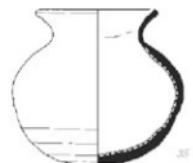
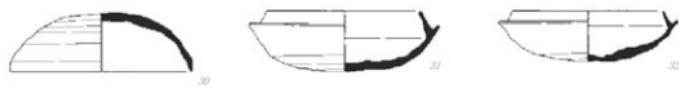
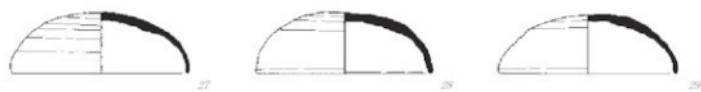


0 20cm

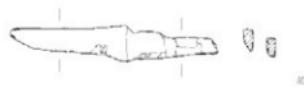
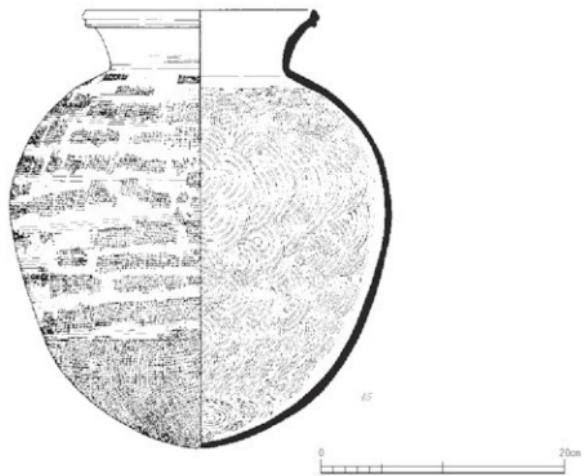


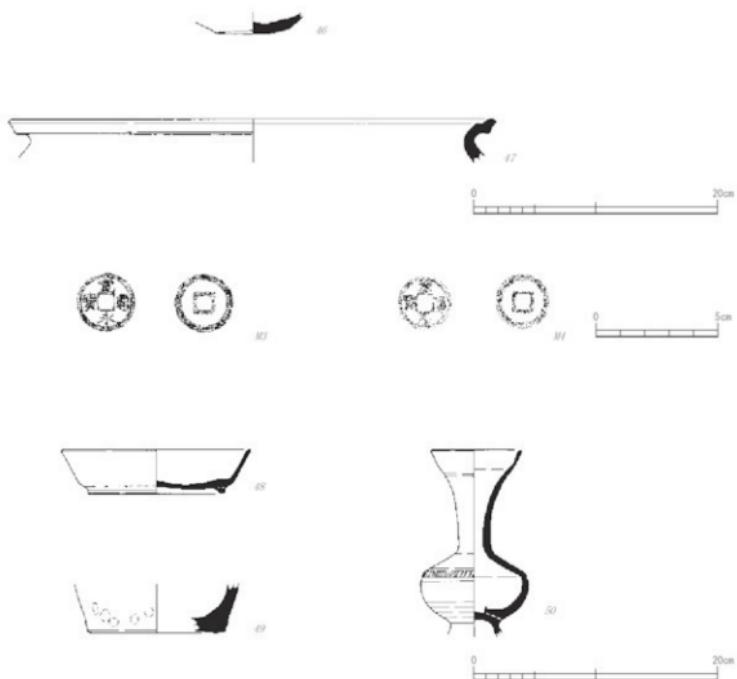
2号墳出土物 1





6号墳出土遺物





3号墳・その他の出土遺物

写 真 図 版



調査地点遠景（南から）



調査地点（大谷川）遠景（南から）

写真図版 2

空中写真 2



調査区全景（天が北）



# 写真図版 4

## 周辺の古墳



1号墳全景（北西から）



3号墳遠景（南南東から）



3号墳石室（南から）



4号墳遠景（南西から）



4号墳全景（南南西から）



4号墳石室（南南西から）



1 トレンチ (南から)



2 トレンチ 3号埴石室



3 トレンチ 周溝 (東から)



3 トレンチ 周溝 (北から)



4 トレンチ (南東から)



5 トレンチ (南東から)

## 写真図版 6

### 1号墳区の調査



1号墳区全景  
(南南西から)



1号墳区全景 近接  
(南から)



1号墳区全景  
(北から)



2号墳区全景（南から）

写真図版 8

2号墳 1



2号墳天井石調査前  
(南西から)



2号墳表土除去後  
(南西から)



2号墳天井石残存状況  
(北から)



2号墳・6号墳全景（南西から）



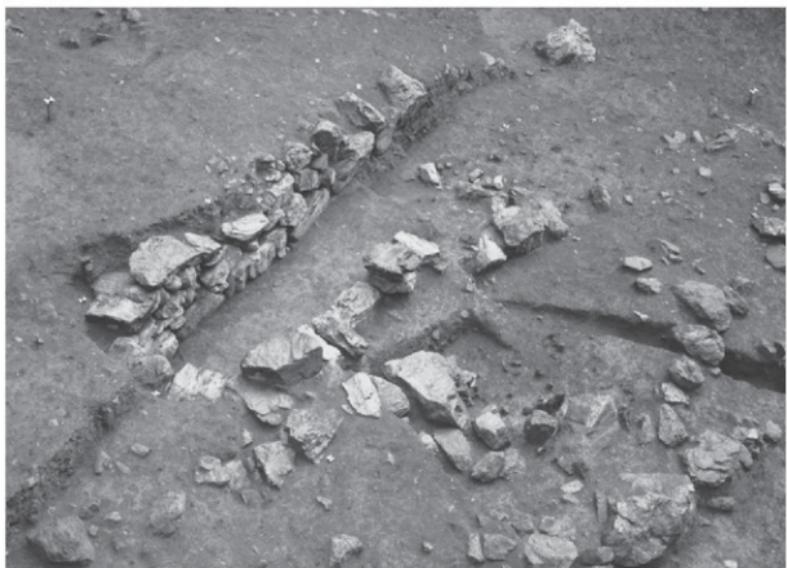
2号墳・6号墳全景（北西から）

写真図版 10

2号墳 3



2号墳・6号墳墳丘側面（西から）



2号墳石室・6号墳墳丘列石（北西から）



2号墳周溝 A-A'  
(西から)

2号墳・6号墳墳丘  
B-C東半 (南から)

2号墳墳丘B-C  
中央 (南から)

2号墳墳丘周溝B-C  
西半 (南から)

写真図版 12

2号墳 5



2号墳周溝D-D'（南から）



2号墳D-D' 墓丘裾部（南から）



2号墳周溝肩D'-D''（南から）



2号墳E-E'（西から）



2号墳F-F'（西から）



2号墳・6号墳墳丘  
断ち割りB-B'（南から）



2号墳・6号墳墳丘  
断ち割りB-B' 近接



2号墳・6号墳B-B' 6号墳墓壌部分



2号墳・6号墳墳丘断ち割りC-C'（南から）



2号墳・6号墳墳丘断ち割りC-C' 墓壌部分



2号墳・6号墳墳丘断ち割りC-C' 墳丘裾部

写真図版 14

2号墳 7



2号墳石室（南西から）



石室完掘状況（東から）



左側壁の状況（南西から）



左側壁の状況（北西から）



奥壁（南から）



2号墳石室  
追葬面の状況（南から）



2号墳石室 奥壁周辺の状況  
(南西から)



奥壁際敷石 近接  
(南から)

写真図版 16

2号墳 9



羨門部付近 追葬面遺物の出土状況



羨門部付近 立面（南から）



羨門部付近の遺物（東から）



羨門部付近の遺物（南西から）



羨道部の壺



2号墳・6号墳重複状況



2号墳・6号石室重複状況



2号墳石室と6号墳石室右侧



2号墳右侧壁下にある6号墳左侧壁

写真図版 18

6号墳 1



6号墳石室全景（南から）



6号墳石室奥壁際の砾床



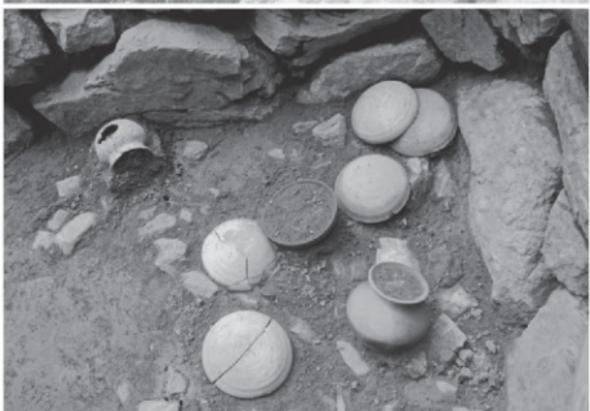
奥壁際遺物出土状況（南から）



6号墳石室遺物出土状況



床面遺物（東から）



床面遺物近接（東から）



床面疊床（西から）

写真図版 20

6号墳 3



6号墳石室基底石  
(南から)



6号墳墳丘基底部の遺物  
(西から)



6号墳墳丘基底部の遺物  
近接 (西から)



5号墳全景(南西から)



5号墳墳丘(南西から)



5号墳墳丘(西から)



5号墳周溝A-A'  
(西から)



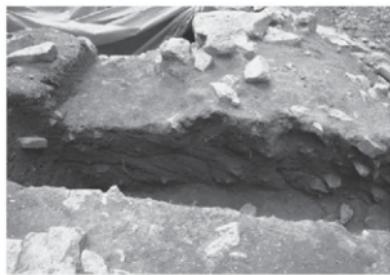
5号墳南側土層断面  
B-B' (東から)



5号墳西周溝及び墳丘  
C-C' (南から)



5号墳西周溝及び墳丘  
C-C' (南から)



5号墳埴丘断ち割りA'-E'



5号墳埴丘裾部断ち割りA'-E'



5号墳埴丘断ち割りD-D' (北東から)



5号墳埴丘断ち割りD-D' (東から)



5号墳埴丘F-F' (北から)



5号墳石室裏込め状況 (東から)



5号墳埴丘断ち割り全景 (東から)

写真図版 24

5号墳 4



5号墳石室（南西から）



5号墳石室（南から）



5号墳石室完掘状況



前壁（玄門側南壁）



右侧壁（西壁）



奥壁



左侧壁（東壁）



石室北西隅の状況（南東から）



羨道部（玄室側から）



石室北東隅の状況（西から）



羨道部（南から）



新旧前壁の状況（西から）



当初の前壁（西から）



左側壁を隠す新しい前壁（北西から）



新しい前壁と右側壁の状況（北東から）



右側壁を隠す新しい前壁



当初の左側壁（西から）



当初の南東隅部分



当初の前壁（北西から）



当初の前壁（正面から）



玄室内副葬品出土状況（南から）



玄室内副葬品出土状況 近接（西から）



南東隅 須恵器壺・高壺出土状況

写真図版 30

5号墳 10



高壺出土状況



北東隅 須恵器壺・甕出土状況 近接



北東隅 須恵器甕出土状況



石棺墓 SX10 (南西から)



石棺墓 SX10a の状況



石棺墓 SX10b の状況



石棺墓 SX10a 側壁の状況



石棺墓 SX10a 奥壁・側壁の状況

写真図版 32

不明石組遺構 SX11・中世墓状石組 SX08 I



石組遺構 SX11 (南西から)



石組遺構 SX11 近接  
(南西から)



SX08 石組 (西から)



SX08 石組 (北から)



SX08 石組 (南から)



SX08 半裁土層断面



SX08 完掘状況（北から）



SX08 完掘状況（東から）



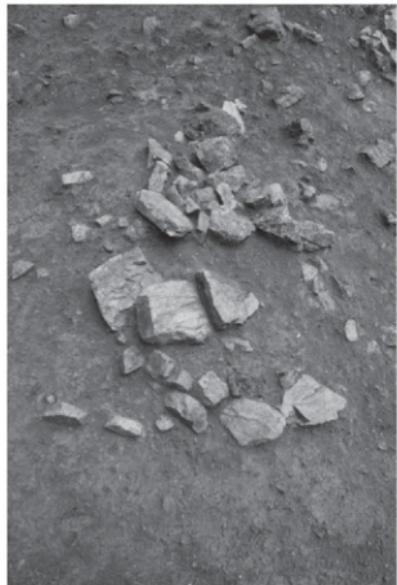
SX08 完掘状況（南から）



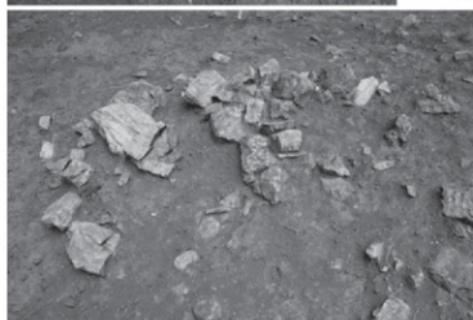
SX08 石組（北から）

写真図版 34

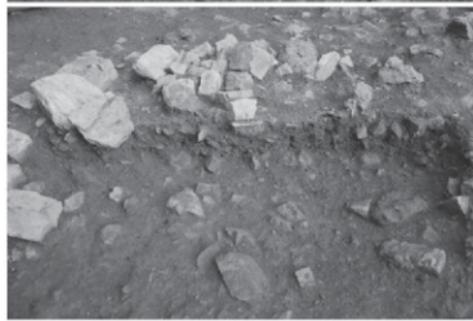
中世墓状石組 SX09



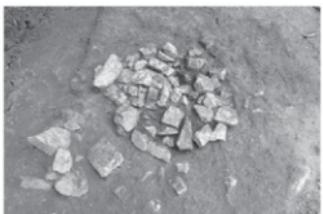
SX09 (西から)



SX09 (南から)



SX09 断ら割り状況 (南から)



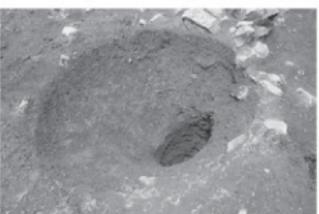
SX02 (南から)



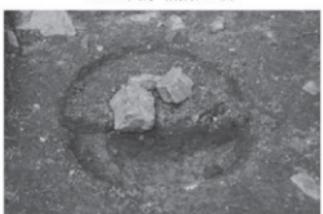
SX02 (東から)



SX02 半裁 (南東から)



SX02 完掘状況 (南東から)



P01



P01 完掘状況



P02



P02 完掘状況



P03



P03 完掘状況

写真図版 36

焼土坑



SX03 ~ 05 検出状況（東から）



SX03 ~ 05 完掘状況（東から）



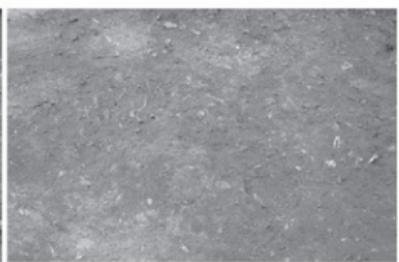
SX04 土層断面（東から）



SX06 検出状況（南東から）



SX06 完掘状況（南から）



寛永通宝出土状況



SX07 上層全景 (南西から)



SX07 上層近景 (南西から)



SX07 上層全景 (南東から)



SX07 上層 (南から)



SX07-A (南西から)



SX07-A (南から)

# 写真図版 38

## 火葬址遺構2



SX07 下層全景 (南から)



SX07 下層全景 (南西から)



SX07 下層全景 (南から)



SX07-A 下層側壁の状況 (南から)



SX07-A 下層側壁の状況 (西から)



SX07-A 下層 (南から)



SX07-A 下層奥壁の状況



SX07-A 下層土層断面



SX07 下層南端の状況



機械掘削状況



人工掘削状況



精査状況



ドローン



ドローンによる撮影



学識経験者亀田先生



丹波市水害の爪痕

写真図版 40

各古墳出土遺物



5号墳出土土器



6号墳出土土器



2号墳出土土器



写真図版 42

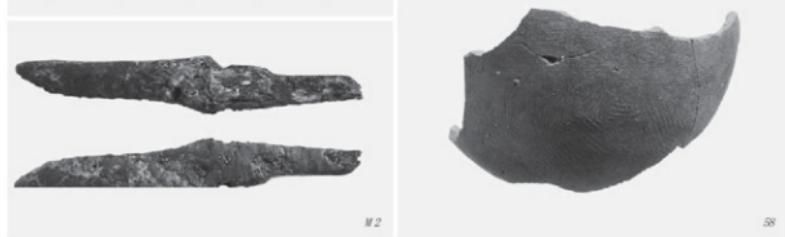
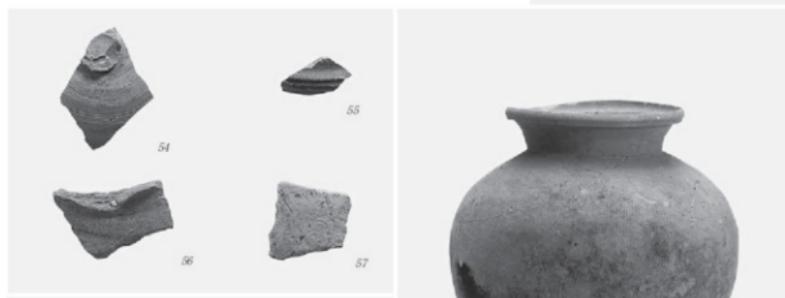
2号墳出土遺物 2





写真図版 44

5号墳出土遺物





46



47



49



59



60



48



50



46



47



49



59



60



M3



M4



M5



M6



## 報 告 書 抄 錄

---

兵庫県文化財調査報告 第 491 冊

丹波市

## 山田大山古墳群

- (砂) 大山谷川通常砂防事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -

平成 29 (2017) 年 3 月 28 日 発行

編集：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中 1 丁目 1 番 1 号

(兵庫県立考古博物館内)

発行：兵庫県教育委員会

〒650-8567 兵庫県神戸市中央区下山手通 5 丁目 10 番 1 号

印刷：交友印刷株式会社

〒650-0047 兵庫県神戸市中央区港島南町 5 丁目 4 番 5 号

---

